

【論説】 樺太といけ花・茶の湯・礼儀作法

—高等女学校、博覧会、『樺太日日新聞』を通して—

小林善帆*

要旨

本稿は、植民地としてありながらも1918年4月以降は基本的に国内法が適用され、1943年4月からは「内地」であった樺太における、いけ花・茶の湯・礼儀作法について、高等女学校における受容、また樺太拓殖共進会、万国婦人子供博覧会との関係様相を考え、『樺太日日新聞』から樺太社会における有り様を俯瞰した。

まず高等女学校において通常「内地」では原則として、いけ花・茶の湯・礼儀作法は卒業アルバムに掲載されることはなく、また短歌の題材になることはない。しかし樺太では他の外地にみられるように写真が掲載され、短歌の題材にいけ花が用いられ、通常「内地」では詠まれない家庭での母親や姉のいけ花をする姿が詠まれたことから、樺太が「内地」に含まれる地ではありながらも、「外地」との認識が持たれていたことが窺える。

次に共進会のいけ花展の開催、女生徒の万国婦人子供博覧会での華道館・茶室の見学は、いけ花・茶の湯が日本を代表する女性文化であるとの認識を植え付けたと考える。

さらに『樺太日日新聞』からは、樺太の衣食住が足りた人々に対し、特にいけ花界の進出が見いだせる。樺太神社大祭にあわせて奉納いけ花展が催され、いけ花は樺太の主要都市に広がり、内地からの出張講習・教授のみならず、樺太に移り住み教える者もいた。茶の湯とともにその歴史や精神性が語られ、樺太に暮らす主婦に必要なものとされた。

Ikebana, cha no yu, and etiquette in Sakhalin (Karafuto): girls' schools, exhibitions, and the Karafuto Nichinichi Newspaper

Kobayashi Yoshiho, Ph.D.

Abstract

This paper explores the April 1918 domestic law's implementation of *ikebana, cha no yu*, and etiquette into the curriculum for girls' education in Sakhalin, which came to be part of Japan in April 1943, and examines the reception of these subjects through exhibitions and competitions such as the Sakhalin Colonisation Prize Show, the International Housewives and Children's Exhibition as seen in the *Karafuto Nichinichi Newspaper* to acquire Sakhalin society at the time.

As a premise, it can be assumed that *ikebana, cha no yu*, and etiquette were included in girls' education within Japan; however, these subjects are not listed in graduation albums. Neither do they serve as themes for the composition of poetry. In Sakhalin, however, as with other colonised regions, these arts are seen in photographs and function as poetic topics: mothers and older sisters who enjoy arrangement, for example. This suggests that even though Sakhalin was part of the Japanese mainland, the population retained their identity as "other".

Competitive exhibitions of *ikebana*, tours of the tea room at the International Housewives and Children's Exhibition in which demonstrations of *cha no yu* and *ikebana* were conducted by girl students emphasised these arts as representative of Japanese female culture to the general public.

Finally, it is clear from the *Karafuto Nichinichi Newspaper* that *ikebana* was promoted as a necessity in Sakhalin. Exhibitions were held during the Karafuto Shrine's Great Festival, spreading this art through the major cities. Workshops conducted by teachers from the Japanese mainland were held, some of whom relocated to Sakhalin. The spiritual history of both *cha no yu* and *ikebana* reflect the necessity of the arts as an accomplishment for housewives living there.

はじめに

筆者はこれまで近代日本におけるいけ花、茶の湯、礼儀作法の受容を教育的側面から明らかにする¹なかで、大日本帝国（以下、帝国日本と記す）の植民地²としてあった台湾、朝鮮、「満洲」（以下、満洲と記す）、サイパン、青島におけるこれらの受容についても検討を加えてきた³。本稿はこれをふまえ、これまで検討を加えてこなかった樺太に焦点をあてるものである。

本稿の指す樺太とは、1905（明治38）年9月、日露戦争におけるポーツマス条約の締結により、ロシア帝国（1917～1991年ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国。以下、ロシアと記す）から帝国日本が譲渡（割譲）された北緯50度以南の樺太島、いわゆる南樺太である。領有当初は軍政が行われたが、その後、軍司令官に属する民政署による民政が行われた。文官による民政は、1907年3月勅令第33号を以て樺太庁が開設されたことによる。樺太はこのようにして帝国日本の植民地（「外地」、以下、外地と記す）となった。

留意したいのは、樺太行政は内地との関係性に特徴がみられたことである。同地は1918年、「共通法」1条2項（1918（大正7）年法律第39号、同年4月17日施行）において内地に含まれることが規定された（「官報」1918年4月17日）。1929年、植民地行政を統括する拓務省の設置に伴い樺太庁は同省に編入され、1942年11月、拓務省の廃止と大東亜省の設置に伴い、樺太庁は内務省に移管された。1943年4月1日、樺太は正式に「内地編入」となり、以後、同地は「内地⁴」（以下、内地と記す）であった。北海道に樺太を含めた場合は北海地方と呼ばれた。1945年8月、ソ連軍による占領。今日、樺太はロシア連邦サハリン州、州都はユジノ・サハリンスク（旧日本名、豊原）と呼ばれる。

樺太の研究史については竹野学⁵、中山大将⁶らの報告がある。同地について経済史、経営史、政治史、歴史地理学、移民史、民族問題、都市史・建築史、教育史、文学史、文化史⁷、地方史など様々な観点からの検討が加えられていることや、共同研究・国際交流の活発化も指摘されている。しかし近代日本において遊芸としてありながらも女子教育に根強く付随し、花嫁修業ひいては日本女性を表象するものであったいけ花・茶の湯・礼儀作法の受容についての考察はみあたらない。

このことから本稿は、1918年4月以降、植民地でありながらも基本的に国内法が適用された樺太におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法について、高等女学校・女学校のありようを確認しつつそこにおける取り入れ、続いて当時全国的に盛んに行われた共進会、博覧会との関係様相、また樺太社会における存在について、『樺太日日新聞』⁸の全記事のなかからこれらに関して拾

¹ 小林善帆『「花の成立と展開」』和泉書院 2007年、同「近代日本のキリスト教主義女学校と精神修養 ―いけ花・茶の湯・礼儀作法・武道との相関を通して」笠谷和比古・上村敏文編『日本の近代化とプロテスタンティズム』教文館 2013年ほか

² 狭義による領有地、占領地を含む。

³ 小林善帆「帝国支配といけ花」国立大学法人名古屋大学博士論文 2018年 国立国会図書館蔵、同「青島日本高等女学校 ―女学生の生活といけ花・茶の湯・礼儀作法―」『いけ花文化研究』第6号 国際いけ花学会 2018年ほか

⁴ 「外地」（帝国日本の植民地・領有地）に対し、日本の本来の領土をさす。

⁵ 竹野学『日本の植民地の現状と課題』第5章樺太、アテネ社 2008年

⁶ 中山大将「サハリン樺太史研究会発足以後の樺太史研究の動向 ―三木理史『移住型植民地樺太の形成』から中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』および〈戦後史〉へ―」『近現代東北アジア地域史研究会』第26号 2014年

⁷ この場合の文化史とは文学史研究から派生する、行政出版物やそこから看取される文化行政、また文学の文化史的な面からの研究をさす（前掲注（4）竹野学『日本の植民地の現状と課題』159、164頁）。

⁸ マイクロフィルム版 株式会社サンコー制作 国立国会図書館蔵を使用。

い上げ、俯瞰し、樺太における受容を考える。

なお本稿は旧字体を新字体に改め、また引用文の歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。

1. 樺太の諸相

最初に樺太という地を確認しておく⁹。樺太の面積は北海道より若干小さく、形状は南北に細長い。気候は亜寒帯モンスーン気候で冬は零下20度、さらに零下30度になることもある。人口は1908年、26,393人であったが（樺太庁統計書）、1920年、105,899人、1926年、203,573人、1930年、295,196人、1935年、331,943人、1940年、414,891人と右肩上がりに伸び続け、以後はやや減少していた（以上、国勢調査による）。昭和初頭（1926年）にはおよそ20万人、1940年代には40万人余であった。

樺太に居住する外国人（外地人）は、1925年12月末現在の庁当局の調査によればおよそ4,000人であった。そのうち朝鮮人が3,500余人、ロシア人が105人、中国（「支那」）人が162人、ポーランド人が18人、トルコ人が28人、ドイツ人2人、スウェーデン人1人で、朝鮮人の約半数は炭鉱の町元泊、恵須取の居住者であった¹⁰。しかしここには短期間の外国人労働者は含まれていない。以後、労働者は増え続けた¹¹。

産業は昭和初期（1926年～）、林業では王子製紙の製紙パルプ工場が豊原・大泊・真岡・泊居・野田・恵須取・落合・知取にあり、敷香には人絹パルプ工場があった。水産業では鯨・鮭・鱒・鱈・蟹・貝類・昆布等の漁獲が多く、その生産加工業も盛んで大泊・女麗には寒天工場、真岡・大泊・本斗・泊居・留多加には蟹缶詰工場があった。鉱業も北西部の塔路¹²周辺で良質の無煙炭が多く採れ、内幌には三菱鉱業の石炭低温乾留工場があった。農作物は主に麦類、豆類、馬鈴薯、蔬菜類、牧草等が作られ、牧畜業は主に牛・馬・豚・鶏・兎・羊・狐が飼育された¹³。

しかしこのように拓殖の伸展があったものの、樺太を扱った小説¹⁴はむしろ過酷な生活を描き、聞き書き¹⁵からは経済的に余裕のない生活が語られていることから、衣食住が足り余裕ある生活ばかりではなかったこともわかる。

教育に関しては¹⁶割譲間もない1906年に豊原に小学校が開校、次いで大泊・真岡に開校した。中等教育では小学校第1回卒業生が送り出された1912年、大泊に樺太庁中学校（後、樺太庁大泊中学校）が設立された。女子に対しては数年遅れて1915年10月に私立大泊女学校、1916年4月豊原に樺太庁高等女学校（後出）が設立された。これらの教育機関はすべて原則として

⁹ 以下、『樺太庁施政三十年史』樺太庁 1936年による。

¹⁰ 『樺太日日新聞』1926年3月24日。以下、豊原、大泊に多かった。

¹¹ テッサ・モーリス＝スズキ「植民地思想と移民 ―豊原の眺望から―」『岩波講座 近代日本の文化史』6 岩波書店 2002年、206～210頁

¹² 恵須取町の一部であったが炭鉱により発展、人口3万余となり1941年に独立して塔路町となる。恵須取町、豊原市に次ぐ規模の町であった。

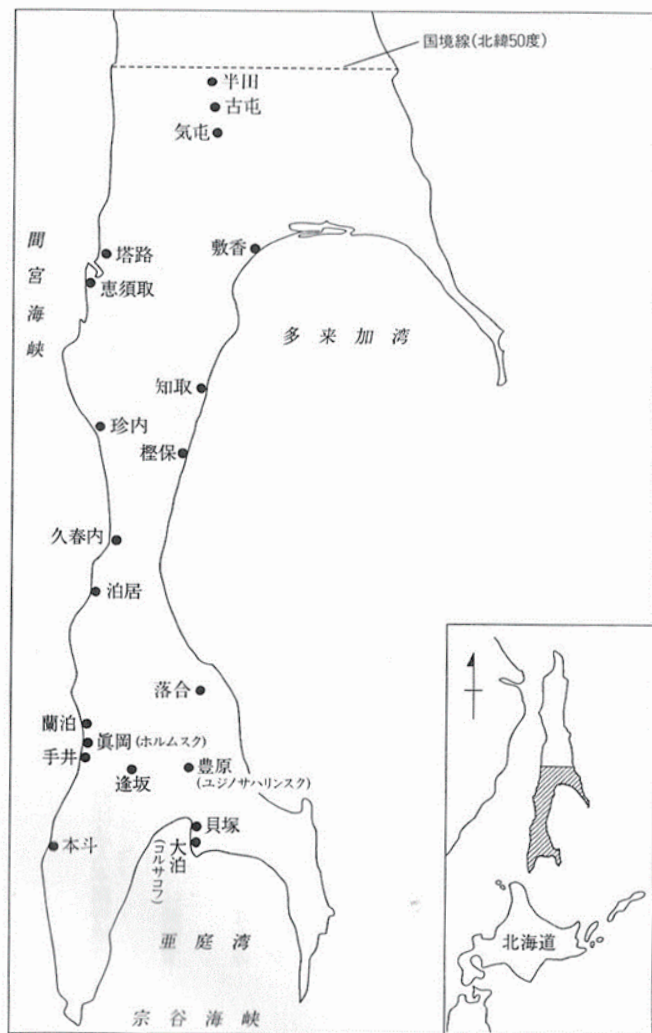
¹³ 『樺太拓殖計画の全貌』中央情報社 1934年、『樺太要覧 昭和十一年』樺太庁 1936年ほか

¹⁴ 黒川創編『〈外地〉の日本語文学選2 満洲・内蒙古／樺太』新宿書房 1996年、『コレクション 戦争と文学17 帝国日本と朝鮮・樺太』集英社 2012年による。

¹⁵ 道下匡子『ダスピダーニャ、わが樺太』河出書房新社 1996年、野添憲治『樺太（サハリン）が宝の島と呼ばれていたころ 海を渡った出稼ぎ日本人』社会評論社 2015年、ほか

¹⁶ 文部省内教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第13巻 教育資料調査会 1939年。高田銀治郎編著『樺太教育発達史』樺太教育会 1936年を使用した。

日本人（内地人）を対象としていた。ここで留意したいのは通常、植民地（外地）では男子が通う中学校よりも、女子が通う女学校・高等女学校の方が先に設立された。それは年頃の娘が進学のために親元を離れ異郷で暮らすことへの心配からであった。しかし樺太の場合、内地と同様に中学校が先に設立された。このことは1918年、国内法が適用される以前から、同地が内地のように認識される一面を持っていたことを示すものといえよう。



樺太略図（ ）内は現在名。

「樺太略図」（道下匡子『ダスピダーニヤ、わが樺太』河出書房新社 1996年からの転載）

1926年3月の時点において、樺太では入学すべき学校自体がなく、父兄は多大の犠牲を払って内地へ子弟を送らねばならなかった。いっぽう内地も入学難ではあったが、選択をしなければ学校自体はあった¹⁷。その後1945年4月1日の時点¹⁸で、高等女学校には樺太庁として豊原・大泊・真岡・泊居の各高等女学校（後出）、また樺太公立として敷香（後出）・知取・惠須取（後出）・落合高等女学校があり¹⁹、男子を対象とする旧制中学校は樺太庁として大泊・真

¹⁷ 「入学難と植民地」『樺太日日新聞』1926年3月2日

¹⁸ 北海道教育研究所編『北海道教育史 地方編2』北海道教育委員会 1957年

¹⁹ 『樺太要覧 昭和17年度』（『高等女学校資料集成』第十七巻外地統計年報編 大空社 1990年、830、831頁）

岡・敷香・恵須取の各中学校があった。しかしそれでも十分な数とはいきれなかった。男子の中学校数が少ないのは、実業（補習）学校が多数あったためと、内地への進学が女子よりも多かったことがいえる。私立幼稚園は1921年8月、大泊に初めて開園し、次いで1923年6月に豊原高等女学校内に開園した²⁰。ほかに夜間中学校、私立女学校、「土人教育所²¹」等も設置されていた。

いっぽう樺太に対する内地での風評は、昭和初期に入っても芳しいものではなく、内地の人が発する質問は、「ホウ樺太、よう樺太に住んでおられるね、冬は外出もよくしない事だろう、アイヌや熊もたくさんをるだろう。こんな物はあるか、あんなものに不自由はないか。」というものであり、樺太在住者は日常なくてはならぬものまで無いのではないかといわれ、嘆いたという²²。また高等女学校の修学旅行一行が帰校すると長い期間、旅行での奇談・珍談が続いたという。たとえば「大津（滋賀県）の宿で夕食のとき、宿の番頭さん板前さんまで総出動で生徒や先生の顔をジロジロ見ている。あとで日本人と変っていないんじゃないかなどという。アイヌ人や樺太土人の子弟と勘違いしていたんですね²³」という話などが残されている。

また、1929年4月29日付『樺太日日新聞』の記事によれば、小学校教科書の樺太に関する記述に少なからざる誤謬があり、すでに数年前から機会あるごとに問題にしてきたが、依然として誤りだらけの教科書が使用されているので、樺太庁当局でも文部省編纂局と打ち合わせを行うべきことを考慮中とある。昭和初期、樺太において少なくとも市街地は内地同様の暮らしがなされたが、内地の人々にはそれが受け入れられていなかったことがわかる²⁴。

2. 高等女学校にみるいけ花・茶の湯・礼儀作法

樺太の高等女学校については、1916（大正5）年4月6日、樺太庁高等女学校官制（勅令第93号）が公布された。次いで同年同月8日樺太庁高等女学校規則（庁令第14号）が公布された。同規則第一章第一条目的は、「本校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トシ特ニ国民道德養成ト婦徳ノ涵養トニカメ兼テ拓殖ニ適応スル女子ノ育成ニ留意スルモノトス」とある。本科の学科目は修身、公民科²⁵、国語、英語、歴史、地理、数学、理科、図画、家事、裁縫、音楽、体操、教育。補習科（本科進学課程）の学科目は修身、公民科、国語、歴史、地理、数学、理科、図画、家事、裁縫、音楽、体操、教育と規定された。各学科目「教授要旨及程度」は、1901（明治34）年度文部省令第4号高等女学校令施行規則第2条乃至第14条に準ずるものとされた²⁶。

いけ花・茶の湯・礼儀作法の内地の高等女学校における教育法令上の位置付けについては、「作法」は高等女学校令（1899年2月公布）における学科目「修身」の一部としてあり学科目としてあったが、いけ花・茶の湯は学科目ではなく、土地の状況により必要な場合に限り正科時間外に教えても差し支えないものとしてあった²⁷。

以下、土地の概況、学校の教育活動全体を念頭に置き、樺太で最も教育内容、設備が整えら

²⁰ 『樺太日日新聞』1922年10月7日、1923年5月20日

²¹ 敷香（オタスの杜）に設置。「アイヌ族以外の土人の子弟を教育」「公立小学校に準じ学習を指導」した（『北海道樺太年鑑』小樽新聞経営株式会社 1940年、213頁）。

²² 『校友会誌』第6号 大泊高等女学校々友会 1930年 241、242頁

²³ 横山俊珠（大泊高女旧教師）「北の追憶」『泊中泊女 思い出文集』樺太庁大泊中学校大泊高等女学校同窓会 1999年、242頁

²⁴ ほかに「内地人に誤解される樺太の農家」『樺太日日新聞』1930年12月17日など。

²⁵ 公民科は当該期では、樺太庁高等女学校にのみ設置された学科目であった。

²⁶ 前掲注（15）『樺太教育発達史』285～290頁

²⁷ 前掲注（1）小林善帆『「花」の成立と展開』178～179頁

れていた豊原高等女学校を中心に大泊、真岡、泊居、敷香、恵須取の各高等女学校、私立女学校等から、いけ花・茶の湯・礼儀作法の受容を考える。

(1)豊原高等女学校

①豊原の概況

最初に高等女学校所在地の概況をみておく。豊原は1908年8月、大泊から樺太庁が移設されて樺太庁ならびに豊原支庁が置かれたことにより、樺太の中心都市となった。1937年、市政施行により豊原町は豊原市となり、豊原支庁は豊栄支庁と改称した。

市街地は駅を中心とした碁盤目状の都市計画によって建設され公園・運動場、競馬場、官幣大社樺太神社（1911年創建）をはじめとする神社、寺院、キリスト教教会、武徳殿、新聞社、市役所、郵便局が設置され、さらに三越百貨店、大江戸百貨店なども開業していた。樺太庁各種機関として樺太地方裁判所、樺太鉄道局、樺太庁中央試験所、樺太庁博物館、樺太庁豊原医院、日本銀行豊原事務所も設置され、産業としては王子製紙豊原工場、樺太製糖豊原工場、缶詰工場などがあり、教育機関も幼稚園、小学校、豊原中学校・豊原高等女学校のほか私立藤川実践女学校、樺太公立豊原市高等女学校、実業学校、夜間中学校、樺太庁師範学校（1939年）、樺太庁樺太医学専門学校（1943年）も設置された。まさに樺太の政治・経済・文化・教育の中心として機能し、近代的な都市形成を行っていた²⁸。現在、サハリン州ユジノ・サハリンスクと呼ばれる。

②豊原高等女学校の沿革

1916年4月官制公布、同年5月樺太初の高等女学校として、豊原旧市街守備隊兵舎の一部を校舎にあて、樺太庁高等女学校4年制が開校した。1921年から順次竣工した同校校舎は家事、作法、乾燥、音楽の諸教室、講堂、寄宿舎、事務所等が完備され、堂々たるものであったという²⁹。1925年8月9日～13日、皇太子殿下（後、昭和天皇）来島の折は、体育ダンス台覧の榮に浴した³⁰。

1927年4月、大泊女学校の樺太庁移管に伴い学校名に豊原が入れられ、樺太庁豊原高等女学校と名称変更を行った。1929年4月からは樺太の高等女学校で唯一、5年制が導入された。「4年制では上級学校へ進む際に落伍者を出す率が非常に高いため³¹」という理由であったことから、上級学校に進む者が多く、高い学力が求められる学校であったことがわかる。生徒は官公吏の家庭の者が多かった³²。

同校は創設当初、第1学年のみ1学級の募集で、全学年が揃ったのは1919年4月であった。通常学校創設の場合、第1学年とともに第2学年以上の編入学も募集して、開校初年度から上級学年も設置したが同校の場合そうではなく、創設を待っていた者も第1学年として入学した³³。1920年3月の第1回本科生卒業にあわせて同年4月、進学課程として補習科が設置された。いっぽう第1～5回（1916～1920年度）入学考査は無試験入学として考査は行われず、出願した者全て入学が許された。これは遠路学校へ試験を受けに来てても不合格であれば経済的見知のみならず、当局者として情に置いても忍び難いものがあつたためであったという³⁴。しか

²⁸ 以上、『樺太年鑑 昭和十四年』樺太敷香時報社 1939年ほかによる。

²⁹ 『樺太日日新聞』1921年9月6日

³⁰ 『樺太日日新聞』1925年8月11日

³¹ 『樺太日日新聞』1928年9月27日、1929年2月1日

³² 『樺太日日新聞』1925年3月17日

³³ 『樺太日日新聞』1921年3月29日、庁立高女本科卒業生36名にたいし、通常16歳で卒業であるが17歳2名、18歳6名、19歳6名、20歳3名があつたことによる。

³⁴ 『樺太日日新聞』1920年1月22日

しそれゆえに「玉石同架」で退学せざるを得ない者も出て、1921年度の入試からは内申書の精査で合格が決められるようになり、その後1926年度の入学試験は国語算数の試験が行われている³⁵。

当初、同校は豊原の小学校出身者でおよそ半数が占められ³⁶、あとの半数が樺太各地域から集まった。樺太に女学校・高等女学校が普及するのは1920年代末から1930年代であり、高等女学校は同校のみという事情があった。このため1927年度の場合、寄宿舎には140名の生徒が暮らし、その大半は樺太西海岸（真岡、本斗、野田など）から来ていた。西海岸方面は吹雪により、豊真線（1928年9月開業）列車の1時間半程度の遅延はもとより、1時間20分の途中停車があるなどの危険・心配があり、冬期の帰省はしないようにという学校の指導も行われるほどであった³⁷。また学校が吹雪のため休校になることが何度もあった。

生徒募集定員については創立（1916年）から1921年までは50名、1922年からは100名となったが毎年200名前後の志望者があり、その後定員は150名となったが、不景気であった1932年度、1933年度においても200名近い志望者があり、まさに難関で入学試験が及ぼす児童、家庭への負担、弊害すらも語られるほどであった³⁸。1937年度からは定員200名（4クラス）になり、1941年度からは定員250名（5クラス、松・竹・梅・蘭・菊）になったが、それでも競争倍率は高かった。1945年には各学年5クラスが4年まで、そして専攻科があり、全校生徒数は千名余となっていた³⁹。1930年にはポーランド人（一説に残留ロシア人）の生徒1名が在学していた⁴⁰。

当時の女子中等教育の主な学校行事に音楽会と運動会があったが、同校においてもそうであった。女子の音楽会に対し、男子の豊原中学校では弁論会が開催された⁴¹。ほかに修学旅行、裁判所の公判見学、パルプ工場・郵便局・樺太庁豊原医院等への社会見学⁴²、冬のスキー大会⁴³、弓道なども盛んであった。社会見学はただ漠然と行われるのではなく、例えばパルプ工場見学の場、「王子製紙会社社員倶楽部の建築様式室内装飾等の実地見学」とあるように、家の内を司る主婦役割という目的を定めてのことだった⁴⁴。

生徒の進路は1921年3月第2回本科卒業生36名の場合、東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）1名⁴⁵、奈良女子高等師範学校（現、奈良女子大学）1名、日本女子医学専門学校1名、日本女子大学国文科1名、本校補習科師範部13名、就職志望者5名、家庭に入る者

³⁵ 『樺太日日新聞』1926年3月7日

³⁶ 『樺太日日新聞』1926年3月7日、1923年2月10日

³⁷ 『樺太日日新聞』1927年11月16日、1929年2月1日。西海岸の大吹雪による列車運転不能に関する記事は、『樺太日日新聞』1931年2月26日ほかにもあり、当時、社会問題になっていたことがわかる。

³⁸ 『樺太日日新聞』1927年1月29日、1932年11月25日

³⁹ 井戸田博子『思い出の樺太』1992年 私家版

⁴⁰ オーシップ・フランニヤさん。辻力編集責任『樺太を生きる 樺太関係資料 図録』一般社団法人全国樺太連盟 2016年、178頁ではポーランド人とある。『樺太日日新聞』1929年4月10日付に1929年4月入学、残留ロシア人オーシップ氏の次女、同校初の外国人生徒、豊原第一小学校を終始優秀な成績で終えたとある。14回生、途中で東京の洋裁学校に転校、戦後ドイツで暮らす（『すゞらん』第5号、249頁、1973年）。

⁴¹ 『樺太日日新聞』1927年7月1日、7月14日、11月16日

⁴² 『樺太日日新聞』1927年11月16日ほか

⁴³ 『樺太日日新聞』1936年3月1日ほか

⁴⁴ 『樺太日日新聞』1927年5月10日

⁴⁵ 同校初の受験者で、試験は1921年1月13日、樺太庁において国語（読解、文法、作文）に関し行われた。受験者は1名のみ（『樺太日日新聞』1921年1月14日）。

14名であった。補習科修了生は11名で教員志望8名、家庭に入る者3名であった⁴⁶。また1923年3月第4回本科卒業生48名の場合、進学希望者は約30名、その半数は同校補習科師範部に進学し、調査の時点で高等教育入学決定者は東京女子高等師範学校1名⁴⁷、東京和洋裁縫専門学校4名、東京女子専門学校2名、京都女子専門学校1名ほかで、医学方面もあるが新聞掲載時においては未知数とある。残りの18名が家庭の手伝いその他であった⁴⁸。

1924年7月、夏季休暇に同窓会を開催するために行った卒業生の現住所調査からは、北海道地方に114名、豊原市内に58名であったといい、卒業後、樺太ではなく北海道で生活する者が多かったこともわかる。また1929年3月卒業の4年生82名の場合、共立女子職業学校5名、歯科医専3名、医専2名、日本女子大学1名、実践女学校高等科（東京、実践女子学園）1名ほかであった。同年4月開設の第5学年へは27名、5年制設置初年度につきこの年の補習科は開設なしであった。就職希望者は2～3名。補習科修了生は31名で全員小学校への奉職希望であった⁴⁹。1935年3月の卒業生107名の場合、補習科38名、女子医専3名、女子薬専2名、女子体専1名、音楽学校1名、裁縫専門学校9名、事務員17名、家庭に入る者36名であった⁵⁰。

最難関の女子高等師範学校入学者を1919年度～1923年度まで毎年1名、1920年度のみ東京・奈良両校に各1名計2名を輩出し⁵¹、毎年、医学専門学校、薬学専門学校に複数の入学者を出した。また裁縫の専門学校に進学して裁縫科の教員、補習科に進学して小学校教員になった者も多く、難関の上級学校への進学、教員養成に力が入れられていたことがわかる。昭和期初頭、事務員になる者も多数でてきている。また一貫して、家庭に入る者が一定数みられる。進路には家庭の方針や経済状況が反映していた。

③いけ花・茶の湯・礼儀作法

1933年11月30日に行われた学芸会（演説会）で、いけ花に関して（指導者風早先生）5年の生徒が「白百合の美」、作法（・茶の湯・いけ花）に関して（指導者柿沼先生）2年の生徒が「床の間の変遷に就いて」、というスピーチをしている。内容の掲載はない。また華道嘱託講師の風早律太郎（華雲）⁵²は、校友会誌に「四季華道に就いて」「礼儀に就いて」という2題の短い随想を載せている。華道については流派で定められた事に従い、自己流もしくは無意識に生けないように心得ることを説き、礼儀については、大いに重んじなければならないことを説いている⁵³。

【写真1】のほか、卒業アルバム『第十九回 記念帖 昭和十三年』には、風早氏と生徒6名が、作法室の床の間を背にし、御玄猪（花器）にかけた「生花様式」⁵⁴のいけ花を前にした写真が載せられている。作法と茶の湯の写真はない。

次に茶の湯について、1939年3月発行の校友会誌（『スズラン』第19号）は、1937年7月の盧溝橋事件をきっかけにして起こった日中戦争が拡大しつつあるなかで、「時局詞章号」と名付けられ、「文章報国の微意を現わした」内容で作られたとあるが、その「学校行事」の紹介の1

⁴⁶ 『樺太日日新聞』 1921年3月29日

⁴⁷ 『樺太日日新聞』 1923年1月11日、女高師入学試験は昨年同様1名であった、入学試験は1月11日から3日間、樺太庁長官室で行われた。

⁴⁸ 『樺太日日新聞』 1923年3月17日

⁴⁹ 『樺太日日新聞』 1929年2月15日

⁵⁰ 「女子の職業教育に就いて 豊原女学校長福山惟吉」 『樺太日日新聞』 1935年3月9日

⁵¹ 『高等女学校資料集成』 第17巻外地統計年報編 大空社 1990年、791、793、794頁

⁵² 1928年10月4日着任（『スズラン』第21号1940年）。

⁵³ 『スズラン』 第14号 豊原高等女学校校友会 1934年 24、25、384～368頁

⁵⁴ 江戸後期につくられた、天地人三才格によるいけ花の様式



【写真1】豊原高等女学校 いけ花 昭和初期 一般社団法人全国樺太連盟蔵

つとして、家政科教員による「茶の湯について」という随想が見いだせる。内容は、茶の湯は嫌いだったが、姉の茶の湯の道具をかりて一人で茶を点てて練習しているうちに茶の湯が好きになったといい、茶の湯はただ茶を点てるだけのものではなく、精神の修養が第一の目的であると述べている。そこには同校作法室での茶の湯授業の写真が掲載されており、作法室が床の間、違い棚がある広い座敷であったことがわかる⁵⁵。また校友会誌「現在職員」⁵⁶に1937年5月31日着任、嘱託小柴ノブとある。

さらに「職員室」という見出しで、嘱託をふくめた教員の時局に則した随想が掲載されるなかで、「礼の道」「弓道」が見いだせる。「礼の道」は、先に記した華道嘱託の風早氏によるもので、「礼道の根幹は自己の修養にあり」「自己が誠の心を以て書見事業に当れば自然と人格も高潔になることと思ひます」とある⁵⁷。風早氏により礼道ひいては華道もまた、修養として教えられた。いけ花や茶の湯は校友会の部活動の一つとして扱われることがあったが、同校では校友会の部活動としては扱われていないことが、校友会誌の「校友会部報」からわかる。希望者への課外授業としての扱いであった。

作法については、次のような3年の生徒の作文も見いだせる⁵⁸。

リ……ン、いよいよ持ってお作法の時間が来た。

今日こそは失敗しない様にと心にきめた。「いつも、お作法の時間は、一回か或は三回も四回もする時があるので」

しばらくして皆教室におさまったと見えてしんとしている。

(中略)

いよいよ先生がお見えになった。そしてお席につかれた。

私は胸がどきどきして来た、もし失敗したらどうしよう。いよいよ私の番が来た。手が震えてきた。ふたを取るのを違えたり、ふたをするのを間違ったり、先生は「此のふたは此ですよ」と教えて下さった。私は目先が真暗になって何が何だかさっぱりわ

⁵⁵ 山口キミ「茶の湯について」『スズラン』第19号 豊原高等女学校校友会 1939年 33、34頁

⁵⁶ 『スズラン』第21号 豊原高等女学校校友会 1940年

⁵⁷ 前掲注(55) 『スズラン』第19号 47、48頁

⁵⁸ 前掲注(53)「お作法の時間」〈文苑〉『スズラン』第14号 290、291頁

からなくなってしまう。皆は笑うし、私は穴があったら入りたい位であった。私ははずかしくて皆と顔を合すのがいやでした。

お作法が終つてから、もうお作法の時間は休もうかと思った。だがこれしきの事だと思つたらおかしくなって一人で笑つて終つた。

苦手なお作法の所作を、一生（所）懸命に受け止めている生徒の姿が目につかぶ。

いっぽう 1936 年度に同校内に「家政専攻部（花嫁学校）」が設置された。教室は同窓会記念館（1928 年 8 月 16 日新築）があてられた。入学試験はなく、「新日本の婦道を修む、敢えて独身を問わず」として既婚者も学ぶことができた。同年 5 月 16 日入学式が行われ、42 名が集まった。学科目、週の時間数は修身（1）、国語（1）、裁縫（15）、家事（3）、華道（2）、茶道（2）、音楽（1）、ほかに講話があり、授業は月曜から土曜まで毎日行われ、科目を一部選択することもできた。服装は和洋服随意、授業料は徴収なしであった⁵⁹。

この試みは昭和初期、世論として「女学校出の妻君は家庭の主婦としてはどうも実用的ではない」ということが聞かれることに対し、同校裁縫家事科担当教諭中里女史は、「社会の女学校卒業生に対する期待が余りに多すぎるからではあるまいか」「充分をいえば卒業後一年位母の膝下にあつて家政の實際を体験させるのがもっとも宜しいだろうと思われまふ」と述べているが⁶⁰、この家政専門部の設置内容から、家庭の主婦としてまず裁縫、家事、それとともにいけ花、茶の湯などを嗜むことが考えられていたことがわかる。

④卒業生の追憶

Kさん 1931 年 11 月、樺太生まれ、豊原で育つ。1944 年 4 月入学。現在、埼玉県在住。

〈地域の生活〉

豊原には小学校が 4 つあった。第一小学校は王子製紙の子たちが多かった。第二小学校は樺太庁の官舎が近くにあり、その子たちが多かった。第三小学校は鉄道線路の南、鉄道官舎があり、その子たちが多かった。第四小学校は南の方にあり、農家、牧場の子たちが多かった。各学校、各学年 4～5 クラスあり、千何百人という児童がいた。

食べ物は魚、鱈・鮭などが豊富にあった。野菜は白菜、キャベツ、馬鈴薯など、秋になると馬車で売りに来たものを買ひ、ムロに備蓄していた。ほかにバター、ソーセージなどもあった。長野の親戚にはお歳暮として塩詰めした鮭一尾丸ごとや、筋子などを送っていた。

外国人はポーランド人のパン屋さん、韓国人、中国人、そしてロシア人がいた。ロシア人は丸太作りの家に住んでいた。家は畳の部屋が 3 つと、板の間がありそこで勉強した。床の間もあった。ひな祭りには七段飾りのひな人形を飾った。奥にトイレと風呂があった。石炭が備蓄してあった。百坪くらいの土地で、裏には花畑もあった。

高等女学校では 4、5 月、雪が消えると林を切り開いた馬鈴薯畑で農作業をした。それは 10 月、寒くなり雪が降り始めるころまで続いた。

〈いけ花、茶の湯、作法〉

母は樺太で池坊のいけ花を習っていた。札幌に住んでいる女性の先生が年に何回もお花屋さんに来ていて、その人に習っていた。茶の湯も教えていた。食事会も開かれた。また、自分も小学校 5、6 年の頃、日曜日に第一小学校の女の先生に、友達 5 人くらいと、裏千家の茶の湯を習っていた。

作法の授業は行われた。畳の縁を踏まないように、座布団の出し方などを習ったのを覚えている。いけ花、茶の湯は高等女学校では習わなかった。

⁵⁹ 『樺太日日新聞』1936 年 5 月 16 日、17 日。16 日の記事には「家政婦専門部」、17 日の記事には「家政専門部」とあり、「家政婦」とあるのは誤植と思われる。

⁶⁰ 『樺太日日新聞』1927 年 1 月 15 日

〈戦後〉

父が樺太庁に勤めていたので、1945年8月16日の帰国船に乗って母と自分たち子二人は日本に帰ることができた。すぐに父の実家がある長野県妻籠宿に行ったが、女学校転入の件もあり札幌へ出た。札幌の公立高等女学校はどこも満洲、朝鮮をはじめとする外地からの引き揚げ者で満杯で順番待ちの状態だったので、私立でカソリックの藤高等女学校が、弁護士だった従兄弟の紹介ですぐに転入できたため、そこに転入した。父は三年後に引き上げてきた。卒業後は東京の共立女子薬学専門学校（後、共立薬科大学、現、慶応義塾大学薬学部）に進学して卒業、就職、結婚して子どももうけた。

この聞き取りから同校（1944、1945年度）においては、作法の授業は行われたが、そのなかや課外にいけ花、茶の湯は習わなかったことがわかる。しかし家庭において、茶の湯は小学校の時に習いに行っていた。また母親はいけ花を習っていた。内地として扱われたといえども、海を隔てた外地としてあった地に暮らしているということが、いけ花や茶の湯の修（習）得に向かわせたと考える。

以上のことから豊原が都市を形成し、同校が帝国日本のどの名門高等女学校⁶¹と比べても遜色のない校舎、学外授業、進学実績、5年制等の教育を行っていたことがわかる。そのなかでいけ花・茶の湯・作法について、ただ通り一遍の実技の稽古としてではなく、演説会のスピーチの題目として扱われたように理念についても言及されたことが窺える。また日中戦争勃発後（1937年7月～）の教師による校友会誌への寄稿から、茶の湯や礼儀作法を修養と捉え、戦時体制における女子の役割として必要なものと位置づけたことがわかる。さらに高等女学校同窓会館での独身既婚を問わず、授業料も徴収なしの家政専門部の開設、その教授内容からはいけ花・茶の湯が学校卒業後の女性のなすべきものとして捉えられていたことがわかる。またその設置は同校として在学中の学力を重視する一方で裁縫、家事、課外で行われるいけ花・茶の湯をないがしろには考えていないこと、その必要性を提示するものであったと考える。

(2)大泊高等女学校

①大泊の概況

大泊は、ロシア領時代には政庁所在地であったが、日本への樺太割譲後の1908年、樺太庁は豊原に移転した。そうではあったが市況は繁盛し、神社はもとより行楽地としてスキー場もある神楽ヶ岡公園がつくられた。北部楠溪町は住宅・官衙区で、南部本町・栄町は繁華な商業区であった。大泊支庁の所在地であり、樺太庁観測所（1905年10月設立）、樺太銀行（1941年以後、北海道拓殖銀行）、王子製紙株式会社パルプ工場、東洋養狐場（毛皮用）、樺太寒天合資会社工場などがあった⁶²。

また、樺太の門戸であるとともに第一の港、陸海交通の要衝であった。同地は樺太南部、亜庭湾頭の千歳湾東端に位置し、1923年5月からは北海道稚内との鉄道連絡船が出ていた。連絡船は稚内を朝の8時に出帆すると、午後4時に大泊港に接岸（所要時間8時間）し、樺太庁鉄道大泊駅午後5時発の豊原方面行きの列車に接続していた。大泊～豊原間は、樺太庁鉄道東海岸線で約1時間であった⁶³。1928年12月には大泊港に大泊港駅がつくられ、同駅と大泊駅間が延伸開業した。現在、サハリン州コルサコフと呼ばれる。

②大泊高等女学校の沿革

⁶¹ 前掲注(1)『「花」の成立と展開』、前掲注(3)「帝国支配といけ花」において考察。

⁶² 『国民百科大辞典』第2巻 富山房 1934年による。

⁶³ 『旧日本領の鉄道 100年の軌跡』講談社 2011年、100頁、1940年の時刻表による。

大泊高等女学校⁶⁴は1915年10月、子女の教育に苦慮した大泊町有志が、島内（樺太）最初の女学校として財団法人大泊女学校を創立したことに始まる。1918年、第1回卒業生14名を出した。このうち6名は大泊町で事務員として就職したが、島内の女学校出身者の就職の嚆矢として成績佳良、評判もよかったという⁶⁵。1922年度は本科50名、実科30名の募集であった⁶⁶。1925年、同校は町に寄附され公立大泊高等女学校として改組改称、本科1学年100名、補習科40名、実科は募集なし⁶⁷となった。しかし町の予算削除により教室は辛うじて間に合わせている状態で、初期の作法室は「八畳敷位の狭い一室あるのみにて二人三人と交代に習うより他に仕方がなく」、ほかに音楽室、理科室、裁縫室も同然で非常に不自由な状態であったという⁶⁸。1927年、樺太庁大泊高等女学校4年制として改組改称した。

生徒の進路は、1933年3月の卒業生進路⁶⁹によれば上級学校志望は女子大学1名、女子医専2名、女子薬専2名、裁縫専門学校6名、豊原高女5年生9名、その他3名。就職希望者46名、家庭における家業の手伝い48名であったというように、医学・薬学・裁縫専門学校への一定数の進学も見られるが就職、家庭に入る者が多かった。

1944年、学徒勤労働員発令により各地に出動、校地四町五反を学校農場とした。また保健教育のため町立病院で実習をおこなった。1945年、育児教育のため保育所を設置した。終戦後、生徒の大部分や女子職員退島により自然閉校となった。

③いけ花、茶の湯、礼儀作法の受容

1927年新築の校舎作法室は、校舎2階の和室にある裁縫室と兼用であった⁷⁰。また同校の校友会誌⁷¹からは、いけ花・茶の湯・礼儀作法に関する活動記事は見いだせない。しかし同誌「学校日誌抄」から1930年5月30日、「福島そよ氏茶華道教授囑託ヲ解カル」、また「本校現職員」として1930年10月着任、「茶湯、生花 囑託 井田千蔵」が見いだせることから、いけ花・茶の湯が教えられていたことがわかる⁷²。

いっぽう同校教員の新田寛は、以下の短歌連作5首「教卓の花」を校友会誌に載せている。

おとめ子のおとめさびして朝なさな代うる教卓の花はすがしけれ
 教卓のせんの板目にすえものゝ影うつろいて散れる花びら
 花がめに挿されし見れば車百合、除虫菊、とりかぶと盛りなるらし
 チョークの粉かゝる恐れつ忘れなぐさの咲けるあえかさは夢とかも見む
 わがこゝろいまやさしけれおとめ子が代えし朝花のつゆふゝむ見つ

である。生徒が入れた教卓の花を5通りの視点から詠んでいる。また女生徒の手になるいけ花を愛おしんでいる。

次に、4年生の生徒2人の作品は、

⁶⁴ 以下、前掲注(23)『泊中泊女 思い出文集』による。同書は大泊ならびに大泊高等女学校の当時についての詳細が語られており、非常に興味深い。また同校と設立前史に関する論考に、池田裕子「樺太における女子教育(1)一私立大泊女学校の樺太庁移管を中心に一」『東海大学国際文化学部紀要』第10号 2017年がある。

⁶⁵ 『樺太日日新聞』1918年5月11日

⁶⁶ 『樺太日日新聞』1922年3月2日、大泊女学校生徒募集広告による。

⁶⁷ 『樺太日日新聞』1924年11月11日

⁶⁸ 『樺太日日新聞』1925年5月17日発行によれば同時期、豊原高女にくらべ同校は諸設備が調えられておらず、格段の差であった。

⁶⁹ 「大泊高女 卒業生の志望」『樺太日日新聞』1933年3月16日

⁷⁰ 前掲注(23)横山俊珠「北の追憶」『泊中泊女 思い出文集』241頁ほかに詳しい。

⁷¹ 大泊高等女学校『校友会誌』第6、11、12、13(1937年)、15号を使用。

⁷² 『校友会誌』第6号 大泊高等女学校々友会 1930年 244、247頁

盛花をいけて見とれる姉上の顔はれやかに美しきかな
母の活けし水仙の花か弱くも夕の寒さに頭垂れをり
とある。2首とも生徒がいけた花についてはないが、家庭での生活のなかにいけ花があり、姉や母親が嗜んでいたことがわかる⁷³。

さらに同雑誌の次号⁷⁴では、5人の生徒が詠んだ次のような教室の花が掲載されている。

水きれし花瓶にたてるコスモスは首うなだれてさびしげに見ゆ
教室の花瓶にさゝれしゆりの花胡蝶も蜂もおとずれて来ず
教室の柱にかけし花さしに白百合の花うつむいて居り
教室の柱にかゝる花さしの冬になるごと造花がさゝれる
教室のすみにおかれた花さしはひとりさびしく人をまちおり

ここから教卓だけでなく柱にも花瓶があったことがわかる。また冬になると寒さのために花材が不足して造花を入れたり、何も入れられなかったことがわかる。しかしこれは題材としては、前号で教師によって詠まれた「教卓の花」に影響を受けてのものであったことが考えられる。

また、同誌15号で詠まれた4人の生徒の作品は、

母上の御手になりける盛花か秋の姿を床に眺めむ
床の間のあやめの花を見た時にほろりと落ちぬ花びら一つ
数日間我が教室を美しくかざりし花の散り行きにけり
教室に掛けし花瓶の赤い花しをれてくびをうなだれにけり

と、家の床の間のいけ花と、教室の花が詠まれている⁷⁵。家庭は床の間のある家で、母親がいけ花をすることがあったことがわかる。そこからは衣食住の足りた余裕ある生活が感じられる。いけ花を素材とした短歌は管見の限り、内地の女学校・高等女学校の校友会誌に掲載された短歌からは見いだせないが、外地の青島日本高等女学校の校友会誌には見いだされる⁷⁶。ここからは外地に暮らす場合に重視された、日本から離れた地にあっても日本人女性としての暮らしをしていることを確認する姿勢が見いだされる。同地が内地と外地の交錯する地であったことが窺える。茶の湯に関する短歌は見いだせない。

以上のことから同校のいけ花・茶の湯・礼儀作法について、教員記録から教えられたことがわかる。また校友会誌に掲載された短歌や記念文集の追憶からは、生徒の家庭でもいけ花が、母親や姉によって嗜まれ、親しまれていたことがわかる。

(3)真岡高等女学校

①真岡の概況

真岡（まおか）は樺太において、大泊とともに豊原に次ぐ都市であり、恵須取（後出）とならぶ樺太西海岸の中心都市で、真岡港は日本最北の不凍港と呼ばれていた。暖流である対馬海流の影響により、比較的温暖な気候の土地柄であった。1919年、樺太工業株式会社によるパルプ工場ができたことから、樺太屈指の製紙業の町となった。しかし樺太工業は1933年、合併により王子製紙株式会社となった。旧制中学校は大泊、豊原に次いで1927年4月、樺太庁真岡中学校が開校した⁷⁷。現在、サハリン州ホルムスクと呼ばれる。

⁷³ 『校友会誌』第11号 大泊高等女学校々友会 1935年 148、156、158頁

⁷⁴ 『校友会誌』第12号 大泊高等女学校々友会 1936年 96～106頁

⁷⁵ 『校友会誌』第15号 大泊高等女学校々友会 1939年 70～73頁

⁷⁶ 前掲注(3) 小林善帆「青島日本高等女学校 一女学生の生活といけ花・茶の湯・礼儀作法一」『いけ花文化研究』第6号、31頁

⁷⁷ 前掲注(28)『樺太年鑑 昭和十四年』による。

②真岡高等女学校の沿革

1926年4月、樺太公立真岡実科高等女学校として設立認可される。修業年限は2ヶ年で、入学資格は高等小学校卒業もしくはこれと同等の学力を有するものであった。入学試験に関して前者は国語、算術、裁縫、後者はそれに日本歴史、地理、理科が加わった。樺太公立真岡第一尋常高等小学校校舎の一部を教室に充て、5月から授業を開始した。生徒は当初一学級30名の募集であった。教授内容に関していけ花・茶の湯に言及していない⁷⁸。

1928年1月、樺太公立真岡高等女学校と改組改称、4月から授業を開始、第1学年120余名、実科生20数名が在籍した⁷⁹。1929年3月、同校廃止。同年4月、樺太庁真岡高等女学校として設置され、新校舎において授業が開始された⁸⁰。生徒は公立時代からの転入として第2学年、2クラス101名と、新入生第1学年は2クラス91名であった。6月、開校式が挙行された。

その後、1930年8月、講堂建築落成。1931年4月、校歌、校章の制定、徽章備用。1932年3月、第1回卒業式挙行、御真影奉安新竣工。1933年3月、天皇、皇后両陛下御真影奉戴。5月、教育勅語謄本下賜。1934年6月、開校5周年記念式挙行。1935年11月、運動場新設並びに寄宿舎新築落成。1937年1月、作業農園約三千坪開設。同年10月、官舎三棟新築落成。1938年10月、校旗制定（創立10周年記念事業）。1939年6月、開校10周年記念式挙行、11月講堂増築落成というように、年を追うごとに学校が整えられていった⁸¹。

③いけ花・茶の湯・礼儀作法

1928年入学生（1回生）は、次のように思い出を記している⁸²。

冬になると一番困ったのは体操時間です。次の時間がお茶の授業である事だ。冬は殆んどスキーに出ることが多かったので、ころんではお尻をビショビショにして帰り、今度は正座してお茶の授業を受けなければならない。よごれた服装のままお茶席へ出る形になってとても気持ちが悪く閉口したものだ。他の人は着替をしたのかも知れない。が、中沢先生に折紙をつけられる位おう楊な子供時代だった私、そんな所まで気がつかなかったのだろう。

そこまではよいとして、お茶のお手前が始まると、お客様になる番が来る。すると、ビケットの入った菓子器が出る。先生に、「失礼。」とか何とか言って、懐紙を出し、ビケットを1個のせて上品そうに半分に折って、おちょぼ口をして押し戴くつらさ。あとの半分は懐紙に入れ、たたんで懐へ。

ビケットは上生のつもりである。口の中はすっぱくなるし、足はしびれてくるし、本当に今思い出しても冷汗ものだった。

ここからは聞き取り（後出、④卒業生の追憶）にあるように、茶の湯が作法の授業のなかでおこなわれたことがわかる。

また1932年度『卒業写真帖』にはいけ花・茶の湯に関して、畳の部屋でいけ花（左上）、「大日本総華督」宮川琴月（華道囑託講師）の幹作りの立花⁸³作品（右上）、「お花の展覧会」二人の人物は華道講師と学校長（左下）、茶の湯（右下）の4点が1頁に掲載されている【写真2】。

⁷⁸ 『樺太日日新聞』1926年2月28日

⁷⁹ 同校では、1928年4月、樺太公立真岡高等女学校入学生を1回生として数える。

⁸⁰ 『樺太日日新聞』1928年2月17日、新築校舎に関し構造は英国式、町役場沼崎技師により設計中とある。

⁸¹ 草野誠一ほか編『韃靼の海 樺太庁真岡中学校・高等女学校回想録』樺太庁真岡中学校高等女学校同窓会1974年、192頁

⁸² 前掲注（81）『韃靼の海 樺太庁真岡中学校・高等女学校回想録』201頁

⁸³ 幹作りの立花とは、木の幹・枝を継いで理想的な形を作る手法による立花

昼の部屋には床の間は写っていない。いけ花は生徒のいけ花の写真のみならず、いけ花展、講師の立花作品までもが掲載されたことから、取り入れの熱心さが窺える。作法の写真はない。



【写真2】左上「お花」、右上「立花作品」、左下「お花の展覧会」、右下「お茶」

出典『昭和7年度 真岡高等女学校 卒業写真帖』樺太庁真岡高等女学校 1932年

9回生（1936年入学）の思い出を読むとお茶、お花、小笠原流の作法、厳しく礼儀を教えられたことが記されている⁸⁴。また校舎敷地略図によれば、二階建て木造校舎2階の一番奥に裁縫室、その手前に作法室が設けられていた⁸⁵。

④卒業生の追憶

0さん 1928年8月生まれ、1942年4月、真岡高女入学、現在、函館在住。

〈地域での生活〉

生まれは渡島半島檜山上国石崎（江差の南）。5人姉妹、家は漁師だったが、小学校4年生のとき生活苦のため一家で樺太へ渡った。塔路という町で暮らした。そこは炭鉱の町で韓国人も多かった。父はカネボウの炭鉱で人の何倍も働き、その後、炭鉱の仕事はとても危険なので、仕事を土木工事に変えて恵須取（王子製紙があった町）へ移った。高等科1年卒業までそこで過ごした。

⁸⁴ 前掲注（81）『韃靼の海 樺太庁真岡中学校・高等女学校回想録』246頁

⁸⁵ 前掲注（81）『韃靼の海 樺太庁真岡中学校・高等女学校回想録』195、226頁

〈学校生活〉

1942（昭和17）年4月、真岡高等女学校に入学、寄宿舎生活をした。学校には寄宿舎が2つあり、学校の横と、坂の下の小さい旅館であった建物があつたが、自分はこの旅館の方にいた。

クラスは3クラスで一組、二組、三組という単に数字の呼称であつた。韓国人も数人いて、そのうちの一人は、塔路の小学校と恵須取の高等科で一緒だつた陳さんという優秀な人で、副級長もやっていた。毎月、真岡神社に参拝に行った。授業は、国語の文法などは好きではなかつた。体育は薙刀や弓道、跳び箱をした。教練は軍人の江村教官で、上・中・下級があり、自分は上級で砂袋を担いで走る、水を入れたバケツを持って走る、千メートル走ることなどをした。

4年生（1945年4月）になると、4年生とともに50名くらいで各自身の回りの物と布団を持って、トラックの荷台に乗せられて、軍馬の牧草狩りの作業を住み込みでおこなつた。毒のあるトリカブトに触れないようにと注意された。馬を外に出して自分たちが馬舎で寝た。徴用された母親が交代で、鯉釜でご飯を炊いてくれた。終戦は伝令により知らされた。それで解散になり、同じ方向へ帰る下級生2人を家に送り届けて帰らねばならなかつた。不慣れな土地で解散を余儀なくされたが、機転を利かせて小学校へ行き、住所などを教えてもらつてなんとか辿り着いた。名好という町だつた。そこで一晩泊めてもらい、自分の家に帰つた。

〈いけ花、茶の湯、礼儀作法〉

作法の時間には、幅2歩半で跨いで、縁を踏まないという畳の歩き方、座布団の出し方、座り方といった立ち居振る舞いをしっかり教えられた。そのとき茶の湯も習つた。1人ずつ、袱紗を交代で借りて、お茶のいただき方などを習つた。しかしいけ花は全くなかつた。

〈戦後〉

昭和20年10月、父が手配したタラスリ船に乗り込み一家で日本へ密航、途中でエンジンが壊れて流されたが利尻島に着き、修理してすぐに稚内に入った。そのとき稚内の旅館のご飯は茶碗のなかに米がほとんど無くて驚いた。樺太では米が備蓄されていて、いつも白米を食べていたし豊富にあつた。

親戚のある余市へ行き、高等女学校を卒業して、当時は教員不足だつたので小学校の教員になつた。結婚前20代のころ、日曜日に勤め先の先生方と裏千家の茶の湯を習つた。結婚もしたが子は作らないと決めていたので作らなかつた。戦前から子らの悲惨な場面を目の当たりにしてきたために、それは心に決めていたことだつた。夫は高校の教員だつた。50歳から60歳までは道立の盲学校で寮母をした。

以上のことから同校において、裁縫室とは別に作法室がつくられ、作法の授業のなかで茶の湯が教えられた。また卒業写真帖や卒業生の思い出から、作法を厳しくしつけられ、いけ花、茶の湯も希望者に教えられたといえる。特に1932年度の卒業写真帖からは、いけ花が熱心に行われていたことがわかる。

(4) 泊居高等女学校

① 泊居の概況

泊居（とまりおる）は樺太西海岸、真岡の北に位置した。1915年、泊居町として発足、泊居支庁の管轄であつた。同年、樺太工業株式会社パルプ工場第一工場が操業を開始した。折しも第一次世界大戦によるパルプ価格高騰の時期に重なり、同社は高収益を上げた。しかし樺太工業は1933年、王子製紙株式会社と合併し吸収された。

同地は泊居川岸に位置し、西海岸最北の不凍港の町として海陸交通の要地になっていた。また農耕地としても発達し、近海の鮭・鱒・昆布・蟹などの水産業も盛んであつた。

1930年に開業した樺太西線泊居駅は、1937年につくられた久春内（くしゅんない）駅に延長

されるまで、最北の駅であった。泊居には旧制中学校はつくられず、樺太公立泊居工業学校が設置された⁸⁶。1942年、管轄が真岡支庁に変更された。現在、サハリン州トマリ、ノボショールヴォと呼ばれる。

②泊居高等女学校の沿革

1928年3月、昭和天皇即位の御大典事業として設立が計画され、泊居町立泊居高等女学校として認可された。泊居尋常高等小学校の校舎の一部を仮校舎とし、小学校校長が同校校長を兼任して同年4月開校した。同年10月、泊居町西ヶ原の新校舎へ移転した。1932年樺太庁への移管により、樺太庁泊居高等女学校と改称した。同年7月、樺太全島高校陸上競技大会で団体優勝、以後毎年のように団体優勝し、1935年10月に行われた明治神宮競技大会に出場した者もあった。1945年4月1日の時点で生徒数220名、4学級（各学年1クラス、補習科なし）、教員数12名の小規模校であった。

戦争終結後、1945年9月、ソ連軍により、島内日本人学校に開校命令が出された。同年10月、ソ連軍、日本人を民政局部長パウロ中佐の下に任命し、教育行政を指導した。1947年8月、泊居尋常高等小学校に泊居高等女学校と泊居工業学校を合併し、総合校とした。1949年6月、全島日本人学校の閉鎖、泊居高等女学校も閉鎖となった⁸⁷。

③いけ花・茶の湯・礼儀作法

同校同窓会発行の写真集『あゝ懐かしい学び舎の思い出』⁸⁸には卒業写真帖からの抜粋として、いけ花の写真が5回生（1934年）和室・生徒18名、6回生（1935年10月）和室・生徒30名、7回生（1936年）和室・生徒38名、14回生（1943年）普通教室・生徒43名（【写真3】）



【写真3】泊居高等女学校14回生のいけ花の授業 1943年

出典：『あゝ懐かしい学び舎の思い出』写真集』樺太庁泊居高等女学校同窓会 1987年

に見いだされ、茶の湯の写真は13回生（1942年）和室・生徒41名、また8回生（1937年）は正座・着物で生徒5名が茶の湯と琴を実演している学芸会の出し物「お琴に合わせて茶の湯」

⁸⁶ 以上、前掲注（28）『樺太年鑑 昭和十四年』による。

⁸⁷ 以上、「樺太庁泊居高等女学校の歩み」『紅葉ヶ丘』泊居高等女学校同窓会 1988年による。

⁸⁸ 樺太庁泊居高等女学校同窓会編『あゝ懐かしい学び舎の思い出』写真集』 樺太庁泊居高等女学校同窓会 1987年

が見いだされる。

1943年のいけ花の写真（【写真3】）は、普通教室で机と椅子により教えられているが、それ以前は和室（畳敷きの教室）で教えられていた。生徒数からはクラス全員でなく、希望者による習得であったことがわかる。また12回生の卒業式の記念集合写真・生徒45名、教職員14名から、式場であった講堂に池坊の幹作りの立花が置かれているのが見いだされる。このような立花作品は、先の真岡高女の卒業写真帖（【写真2】）にも見いだされ、いずれもいけ花が熱心に教えられたことを物語るものといえる。

いっぽう、泊居支庁聯合女子青年団の事業概要に生花講習会が明記されていることから、同地には熱心ないけ花の指導者がいたことが思われる。他の支庁からは見いだされない⁸⁹。

(5) 敷香高等女学校・恵須取高等女学校

① 敷香高等女学校

敷香（しすか、内務省告示では「しくか」と読む）は東海岸にあり、敷香支庁管内の最北の町であった。町内には先住民族の集落・オタスの杜があり、先住民族のための学校が設置されていた。1936年8月、落合から敷香まで鉄道が通ったことにより、樺太庁鉄道東海岸線で大泊港から豊原、落合を通り知取⁹⁰を経て敷香まで、およそ14時間でつながった⁹¹。町の北端は国境線である北緯50度であったため、1939年第二次世界大戦勃発の頃には軍事上重要な地域とみなされ、陸軍部隊が駐屯していた。近隣の内路に飛行場も整備されていた。現在、サハリン州ポロナイスクなど。

樺太公立敷香高等女学校は1939年4月に開校した。4年制、定員400名、クラスは松・雪の2つで、1クラスおよそ50名であった⁹²。男子教育では同年同月、樺太公立敷香商業学校、翌1940年4月、樺太庁敷香中学校が開校した。重要な地域となったことが見て取れる。

『樺太庁敷香中学校・樺太公立敷香高等女学校 凍土〈別冊〉アルバム 第35回記念』⁹³には、掛軸4幅が一度に掛けられる床の間、その両脇に違い棚があるという、とても広く立派な作法室でお点前を習っている写真が掲載されている。また「卒業証書」とともに「華道証（證明書）」の写真も掲載されている。それは1945年3月17日卒業式の日発行されたもので、発行者は同校校長の松尾重壽、証書の文面は、

右者本稿ニ於テ華道執心セシニ依リ茲ニ此ノ証ヲ授与ス

教師 大日本総会頭職 木村まよ

とある。具体的な流派名は記されておらず。いけ花（華道）を同校華道嘱託講師に学んだことが証明されている。生徒は1928年4月3日生れであった。

同校では作法はもとより、いけ花・茶の湯が教えられていたことがわかる。しかし1942年4月入学の4期生の思い出からは、「3年生（1944年度）になると太平洋戦争が激しくなり授業などそっちのけ、勤労奉仕に明け暮れた。兵隊さんの軍服の修理、弾磨き、援農とあちこちに合宿した⁹⁴。」とある。1945年3月発行の華道証明書は、いけ花が勤労奉仕の合間を縫ってでも

⁸⁹ 前掲注（16）『樺太教育発達史』431頁

⁹⁰ 樺太公立知取高等女学校（1939年4月創立）があった。知取には、生花店が2件あった（「付録 知取町商工人名総覧」『ななかまど写真特集号』樺太公立知取高等女学校中学同窓会1982年）。

⁹¹ 前掲注（63）『旧日本領の鉄道 100年の軌跡』、102頁

⁹² 1935年4月、樺太公立敷香実科高等女学校として8名で開校。1939年4月、昇格

⁹³ 樺太庁敷香中学校・樺太公立敷香高等女学校同窓会発行 1996年

⁹⁴ 樺太庁敷香中学校・樺太公立敷香高等女学校同窓会『創立50周年記念 同窓会誌28輯

教えるべきと考えられたことを意味しよう⁹⁵。

②恵須取高等女学校

恵須取（えすとる）は西海岸、間宮海峡に面する町で、恵須取支庁が設置され、真岡とならぶ西海岸の中心的都市としてあった。王子製紙（旧樺太工業）の製紙工場と炭鉱の町として発展した。「恵須取町市街図」から、市街地は碁盤目状に形成されていたことがわかる。旧制中学校は設置されず、1939年4月、樺太公立恵須取商工学校2年制が設置された。現在、サハリン州ウグレゴルスクなど。

女子中等教育は1937年4月、樺太公立恵須取実科高等女学校2年制が、入学資格は高等科（2年）を卒業した者、1学年1クラス50名として開校した。1943年4月からは、樺太公立恵須取高等女学校4年制、1学年定員100名が開校した。実科高女1年と2年はそれぞれ同校3年と4年に編入した。寄宿舎はなく、第1学年121名の居所内訳は自宅通学者102名、親戚宅4名、知人宅10名、下宿5名であり、通学方法は徒歩が107名、汽車が14名で、多くが学校周辺の市街地に居住するものであったことがわかる。

いけ花・茶の湯については、教職員一覧に茶華道囑託、大木おをゑ、とあるのが見いだせることから、教えられたことがわかる。随意科目として商業（簿記）が取り入れられていることから⁹⁶、卒業後就職する者が多かったと思われる。

(6)私立女学校⁹⁷

①私立藤川実践女学校

1926年9月、豊原の元法華寺跡を仮校舎として開校した。修業年限は本科二ヶ年、補習科一ヶ年。各学年50名以内、生徒定員は150名。学科は修身、裁縫、家事、技芸、割烹、体操、「科外」として生花、点茶、染色一班。1928年3月、第1回卒業生は34名、卒業記念に刺繍の額を豊原神社に奉納した⁹⁸。裁縫技芸の女学校ならではといえる。

設立者は藤川マキエ 29歳で、豊原町大通り八丁目居住の金融業斎藤林蔵氏が一切の後援をすることになっていた。開校理由は、樺太における女子中等教育機関の不足緩和のためとある。1926年の時点で開校していた豊原高女と大泊高女の2校のみでは、志願者の5分の1を収容す

凍土』樺太庁敷香中学校・樺太公立敷香高等女学校同窓会発行 1989年、239頁

⁹⁵ 内地での習得の事例に、岐阜県立岐阜高等女学校の聞き取り調査によるものがある。同校では1945年4月において、1年生のみ授業があり、2年生は仮設の学校工場で作業、3、4年生は各務原飛行場で勤労奉仕を行っていた。1年生は5月と6月の各1回、1クラス約50人で、作法の授業として茶道久田流の60歳くらいの男性に、教室とは別棟の記念館にあった床の間のあるりっぱな作法室でお話を聞き、お辞儀の仕方などを習った。茶道具はなく、勿論お点前をすることもお茶・お菓子をいただくこともなく、ただ「袱紗さばき」だけを皆でならった。いけ花はなかった。校舎は7月6日の岐阜空襲で焼失し、以後は午前午後の2部制の青空学校であった。1学年5クラスあった。鉄筋コンクリートの記念館は空襲による焼失を免れ、戦後、県立岐阜高等学校内に移築された。またお茶・お花は女学校在学中や卒業後、師匠宅に習いに行っていたという。親の茶の湯趣味により、子の小学生が習うことも稀にあった。以上のように、1945年においても礼儀作法関連の内容は教えられていた。

⁹⁶ 以上、『樺太恵須取高等女学校校友誌『恵女』』樺太公立恵須取高等女学校同窓会 1996年による。

⁹⁷ 樺太に於ける私立学校の規定には、樺太庁令第34号私立学校規則が、1920（大正9）年9月29日に公布施行された（『高等女学校資料集成』第17巻外地統計年報編 大空社 1990年、393頁）。

⁹⁸ 『樺太日日新聞』1928年4月3日

ることができない状況であった⁹⁹。それに加えて当時、児童の激増が見込まれ、進学者の増加が考えられた¹⁰⁰。いっぽう三年後に第1回卒業生を出すまでに小学校裁縫科の専科正教員の資格を申請予定とある¹⁰¹ことから、ただ裁縫・家事等の技術を得るだけでなく、教員養成が設定されていたことがわかる。

②私立豊原女子職業学校¹⁰²

家庭的な女子技芸、特に裁縫科の実用的な教授を掲げ、佐藤庄吉が設立を計画、1927年4月開校予定で2月、豊原大通南六丁目十九に借り事務所を設け生徒募集を開始した。修業年限は本科2年、別科1年（裁縫専修速成科）。本科1学年50名、別科30名。学科目は修身、国語、数学、家事、裁縫、手芸、体操、唱歌等、科外として生花、煎茶が設定された。しかし同校についてその後の新聞記事、公的な記録は見いだせない。豊原ではすでに藤川氏の学校が開校しており、学校不足といえども裁縫を主とする私立女学校がこれ以上望まれなかったことがいえよう。

藤川実践女学校のほかに私立学校¹⁰³として、同様に小規模な学校であったが大泊女子職業学校（1928年4月開校）、大泊実科女学校（同年同月開校）、知取和洋裁縫女学校（1933年4月開校）が記録に残る。しかし学科目の詳細やいけ花・茶の湯の取り入れについては明らかではない。

3. 共進会、博覧会におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法

①樺太拓殖共進会¹⁰⁴の開催

共進会とは1879年、横浜で開かれた製茶共進会、生糸繭共進会を最初とし、産業の発達、交流をはかるため、産物や製品を一堂に集めて展覧し、優劣を品評する会で、殖産政策の一環として全国各地で催された。樺太においても1936年8月、「樺太庁始政三十回記念樺太拓殖共進会」が開催された。この共進会は官民協力の後援により豊原、大泊が各々主催して両町で開かれた。両会場とも会期15日間の入場者は30万人にのぼった。この会は、「島外の士に対しては樺太の実情に就き正確なる認識を喚起する」ものであり、「諸般の施設を如実に展示し、以て本島文化の全般を表徴するもの」であった¹⁰⁵。展示施設等は樺太産業の精粹を集めた陸産館、近代科学館、殖産館、府県館、陸軍館、テレビジョン、北海道特設館、各種商店の特設館、園芸館、迎賓館、噴水塔、動物園、模範住宅、放送所などがあり、農産品をはじめとする種々の審査会、表彰も行われた。

この会期中を通していけ花展も、豊原中学校を会場として開催された。主催者としてはすでに1927年に樺太の各流花道聯合が組織されていたがそうではなく、拓殖共進会主催として松月堂古流と風早流（家元は豊原高等女学校華道嘱託講師の風早華雲）¹⁰⁶のみの出瓶であった。

⁹⁹ 『樺太日日新聞』1926年2月4日

¹⁰⁰ 『樺太日日新聞』1925年10月28日

¹⁰¹ 『樺太日日新聞』1926年9月7日、1927年2月26日「実践女学学則」

¹⁰² 『樺太日日新聞』1927年2月24日

¹⁰³ 前掲注(16)『樺太教育発達史』363～377頁

¹⁰⁴ 共進会とは内国勸業博覧会と並ぶ明治政府の勸業政策事業で、産業の発展に貢献した。

¹⁰⁵ 序文『樺太庁始政三十回記念樺太拓殖共進会 記念写真帖』樺太日日新聞社発行 1936年9月

¹⁰⁶ 風早氏は、生花様式は池坊ないしは池坊系の流派に属し、その大日本総華督として教えた。しかし盛花様式については風早流家元として活動をしていた。このようにして両様式を行うのは、当時の一般的ないけ花のありようであった。この風早流の華展には豊原高女の生徒・関係者も見学に訪れたであろう。

会場は通常いけ花が教えられる女学校ではなく、男子を対象とする中学校が使用され、流派競演としてはおこなわれなかった。諸事関係の複雑さも窺えよう。

ほかに弓道は8月16日に豊原公園で豊原弓道連盟の主催で行われ、参加者は100名であった。また8月21日には、全島演武大会が武徳殿において大日本武徳会樺太支部の主催で行われ、参加者は300名であった。いけ花展を含むこれらの催しは、共進会会場外の施設で行われ、いわゆる協賛という形であった。しかし茶の湯に関する記事は見当たらず、また能楽も『樺太日日新聞』や高等女学校校友会誌から同地で親しまれていたことは一目瞭然で¹⁰⁷、朝鮮や大連の博覧会¹⁰⁸では開催されたが、同会の資料からはみあたらない。『樺太日日新聞』を読むと特に弓道、武道（剣道・柔道）の記事は非常に多く、習（修）得に力が入られていたことがわかる。武道は男性のみであったが、弓道は女子にも取り入れられ、その弓道や武道大会とともに、いけ花展も開催されたことは、いけ花が同地において盛んであったことを意味すると考える。

②万国婦人子供博覧会の見学

江戸末期、欧米における万国博覧会への参加がきっかけとなり、明治期以降、日本では博覧会ブームが起きた。そのなかで婦人博覧会も数多く開催されたが、その嚆矢は1907年、矢島樺子を会長として行われた「婦人博覧会」が挙げられる。その趣旨としては「日本婦人の素晴らしさを国内外に知らしめ、また一層の進展をもとめる」「日本婦人の「高尚」な趣味や伝統文化を世に親しめる」というものであった¹⁰⁹。

豊原高等女学校では5年生を対象に、1933年3月下旬～4月にかけての2週間、東京関西方面への修学旅行を行った¹¹⁰。その旅行記¹¹¹には同年4月3日、東京で、「万国婦人子供博覧会」を見学したことが記され、第二会場の竹の台博覧会には交通館、宝物館、教育館等とともに華道館もあったとして、以下のように報告している。

此所には生花は勿論の事、それ等の用具陳列、まだ目にした事のない様な立派な花器、
其の他季節物のお華の生込等、我国独特の床しい流儀を偲ぶに充分な所であった。

ここからは生徒が、いけ花について一通りの知識を持っていること、女性の嗜みとして必要なものと認識していることがわかる。またそれ以前に、女性のための博覧会に華道館があったことは、当時の社会において、女性のなすべきものとして重要視されていたといえる。「建坪百坪の生花大会々場並に茶室二棟を建設し、華道部は全国各流の優秀花を広く紹介し、^(ママ)開期中一般の観覧と接待に供した」¹¹²とあることから、全国的規模のいけ花展と、茶の湯（呈茶）が

¹⁰⁷ 同窓会春季総会、夏季大会の余興では、謡曲や仕舞また琵琶も披露されており、これらを習得していたことがわかる。『校友会誌』第6号 大泊高等女学校校友会 1930年、232、233頁

¹⁰⁸ 1925年8月～9月に大連市で開催された大連勸業博覧会では、能楽堂が作られた。また同所でいけ花の展覧会が開催されるとともに、抹茶が饗された。

¹⁰⁹ 木村涼子監修・解説『復刻版近代日本博覧会資料集成／子ども・家庭・婦人博覧会』別冊解説 国書刊行会 2018年、2、3頁

¹¹⁰ 同校の修学旅行については、池田裕子「樺太における高等女学校の修学旅行 ―樺太庁豊原高等女学校を中心に―」『稚内北星学園大学紀要』No.8 2008年において1926年～1930年の修学旅行、同「樺太庁豊原高等女学校の修学旅行 ―1940年の「聖地参拝」を中心に―」『東海大学国際文化学部紀要』第12号 2019年があるが、同博覧会についての具体的な考察はない。

¹¹¹ 『スズラン』第14号 豊原高等女学校校友会 1934年 359～380頁。

¹¹² 『万国婦人子供博覧会報告』万国婦人子供博覧会事務所 1935年（木村涼子監修・解説『復刻版近代日本博覧会資料集成／子ども・家庭・婦人博覧会』第4巻 国書刊行会 2018

行われたことがわかる。

もちろん見学は華道館のみでなく、第一会場本館では全国の産物とともに樺太の産物の陳列を見学し、三井館、三菱館等からは実業界の状況を知るなどしたことを記している。また同博覧会には全国から集められた児童の図画や手工芸品も展示され、樺太の児童の入選作品も展示された¹¹³が、女生徒は見学の有無に言及していない。

同博覧会の詳細について「万国婦人子供博覧会規則¹¹⁴」を読むと、その目的に「常識並情操ノ涵養ヲ図」るとあることが見いだされる。また主催者は社団法人工政会¹¹⁵及び大日本聯合婦人会¹¹⁶で、会期は1933年3月17日から5月10日迄であった。同博覧会組織は国を挙げての体制をとり、とりわけ女子教育の要職に就いている女性が名を連ねた¹¹⁷。華道館は、「茶華道大会々場」とも記されている。いけ花と茶の湯が外国大使・公使、文部省（現、文部科学省）、学校教育、社会教育と接点を持つものであり、日本女性の「高尚」な趣味や伝統文化として「万国」いわゆる世界のあらゆる国に紹介するものとしてあったことがわかる¹¹⁸。

以上のことから、いけ花・茶の湯が帝国日本を代表する女性文化としてあり、女性の「高尚」な趣味や伝統文化として世界（万国）に発信されるものであるとして、女生徒の胸に刻まれたといえよう。

4. 『樺太日日新聞』にみるいけ花、茶の湯、礼儀作法

ここでは『樺太日日新聞』に掲載されたいけ花・茶の湯・礼儀作法の記事から、樺太におけるこれらの様相を俯瞰する。

1908年、豊原に樺太日日新聞社が開業し、『樺太日日新聞』を創刊した。同紙は樺太庁発行『樺太庁公報』の公式登載新聞であり、各裁判所の公告も登載された。世界情勢、東京の情勢はもとより樺太施政・開発・移民・漁業問題・教育文化等に関する記事、また連載小説、各種広告も掲載していた。同社は1920年には豊原本社のほかに東京・大泊・真岡・泊居・本斗支店が置かれていた。1942年2月、戦時統合により同社は『樺太旭新聞』『樺太時事新聞』『樺太毎日新聞』と合併して樺太新聞社となり、読売新聞社傘下のもと『樺太新聞』を発行した。

現存する『樺太日日新聞』は1910年5月11日発行分以降で、原紙は国立国会図書館蔵と北海道大学付属図書館蔵のものがある。両者を相互に欠号補完して一体化したものがマイクロフィルム版であり、本稿はこのマイクロフィルム版¹¹⁹を使用した。

【表1】は『樺太日日新聞』の広告を含む全記事からいけ花、茶の湯、礼儀作法に関するものを抜き出して一覧にしたものである。以下①いけ花、②茶の湯、③礼儀作法の樺太社会への発

年)

¹¹³ 『樺太日日新聞』1933年3月30日、4月23日、

¹¹⁴ 前掲注(109)『復刻版近代日本博覧会資料集成／子ども・家庭・婦人博覧会』別冊解説22～26頁

¹¹⁵ 1918年創立、日本の工業力振興を推進することを目的とした技術者運動団体。

¹¹⁶ 1931年6月結成、会長三条西信子、文部省系の女性団体。1942年、大日本婦人会に統合された。

¹¹⁷ 顧問には外国の各国大使・公使、日本側は各大臣、植民地各総督、貴族院議員、理事には井上秀子、吉岡弥生、本野久子、山脇房子らの名前も見いだせる。

¹¹⁸ 1893年シカゴ万国博覧会において刊行した『日本の婦人』に、すでにいけ花や茶の湯が「婦人の思想を高尚に」するものとして取り上げられている（米国博覧会日本婦人会編『日本の婦人』大日本図書 1895年、165頁）。

¹¹⁹ 『樺太日日新聞』マイクロフィルム版、株式会社サンコー制作、1910年5月～1942年1月、163リール、国立国会図書館蔵

【表1】 『樺太日日新聞』にみるいけ花、茶の湯、礼儀作法の記事一覧

| No. | 西暦 | 和暦 | 月日 | 種類 | 記事分類 | 記事見出し | 記事内容概略 |
|-----|------|------|-------|--------|----------|--|--|
| 1 | 1918 | 大正7 | 9.7 | 花 | 花材 | 此頃の草花 | 「生け花としては最も適はしいグラウウスは徐々に真赤な花を着けて来た」 |
| 2 | 1920 | 大正9 | 10.29 | 花 | 雑誌広告 | 広告『婦人くらぶ』11月号 | 活花は人格の反映 |
| 3 | 1921 | 大正10 | 7.1 | 花・茶・作法 | 雑誌広告 | 広告『婦人倶楽部』7月号 | ・生花諸流の特徴と礼法 ・茶道の礼法 ・日常生活に必要な礼法の心得 |
| 4 | 1921 | 大正10 | 7.30 | 茶 | 雑誌広告 | 広告『婦人倶楽部』8月号 | 茶道の極意と精神の修養 |
| 5 | 1923 | 大正12 | 5.8 | 花 | 言説 | 生花に就いて 軒氏談 意義ある家庭美術(一) 吉田南陽 | 花道の二大要素は、一つには植物の自然を觀察して、これを美化し以て美的思想の涵養に資する。もう一つは人倫五常の教理を以て規矩とし、人道修養の具とするにある。 |
| 6 | 1923 | 大正12 | 5.9 | 花 | 言説 | 生花に就いて 軒氏談 自然は華道の生命(二) 吉田南陽 | 活花の枝は、其枝が唯其人の器用によりなりし得られるものと心得るのは、甚だしい誤解である。 |
| 7 | 1923 | 大正12 | 5.10 | 花 | 言説 | 生花に就いて 軒氏談 自然は華道の生命(三)・華道会得の真義(四) 吉田南陽軒氏談 | 偏倚した趣味に墮落せず、自然に対する敬虔な精神を以て華道の達成に心がくべき。 |
| 8 | 1923 | 大正12 | 8.2 | 花 | 講習会・いけ花展 | 盛花の講習会・展覧会 | 盛花は近頃著しく流行。札幌市から小原流盛花投入の方法を広めんと来島。講習は7月29日～8月2日まで。会場は大泊記念館。講習料は5日間、花材込みで一入三円、学生は一入二円。2日午後1時から、講習終了式を兼ねて一般へ展覧会。 |
| 9 | 1923 | 大正12 | 8.25 | 花 | いけ花展 | 盛んなりし生花会 南陽軒社中祭典を機とせる | 吉田南陽軒一校社中一同。22日から24日、豊原町大通り南2丁目結城指物店方を借り受けて開催。ロシア人1名を含め40余人。非常なる盛會、且又講評を博す。 |
| 10 | 1924 | 大正13 | 1.16 | 花 | 雑誌広告 | 〔広告〕『生花雑誌国華』大日本国華会 | (内容) 生花、盛花投入、礼式、一読了解秘事秘法公開。 |
| 11 | 1924 | 大正13 | 5.10 | 花 | 雑誌広告 | 池坊生花の機関雑誌『国華』講読希望者 | 豊原町東一条南六丁目、渡辺方に出張所を持つ、池坊生花教授・吉田南陽軒・豊原国華会支部長まで。 |
| 12 | 1924 | 大正13 | 5.10 | 花 | いけ花展 | 豊原国華会支部 生花展 | 五月中旬、町内神社通り羽陽会において、社中展の予定。 |
| 13 | 1924 | 大正13 | 5.15 | 茶 | 講習会 | 豊原町婦人修養会例会 | 明後17日日曜日午後1時より、女学校において開催。当日は太田夫人(幹事の太田とく子)より、お茶のたて方についての教示あり。 |
| 14 | 1924 | 大正13 | 5.20 | 花・茶 | 師匠紹介 | 師匠雑記(十五) 太田春水 | 生花は池坊、弟子は30人ばかり。茶の湯は表千家、弟子は相当にある。ほかに義太夫、長唄なども嗜む。 |
| 15 | 1924 | 大正13 | 5.21 | 花 | 言説 | 師匠雑記(十六) 吉田南陽軒 | 婦人として一通りの心得が必要だと思ふ。今日生花の流儀では、古流、石州流、遠州流、青山流、自然流、宏道流、尊敬流、池坊など、種々の流派が沢山あるが、婦人所は皆一つで自然の趣を其儘にして高尚優美な味を賞讃するのである。 |

| | | | | | | |
|----|------|------|---------|-------|----------------------------|--|
| 16 | 1924 | 大正13 | 5.22花・茶 | 師匠紹介 | 師匠雑記 (十七) 吉田南陽軒 | 茶の湯は裏千家。今年57歳の好翁、福島市生まれ。大正9年5月、福島県華道会から榊太へ転任を命ぜられた。しかし当時は趣味を持つ人も少なかった。現在では、大泊、豊原、落合に弟子。その社中でも一番因るのは花材のないこと、特に冬期間。一番苦痛で養展を阻害する原因。 |
| 17 | 1924 | 大正13 | 8.19花 | いけ花展 | 榊太神社祭典当日に祭典奉納生花会 | 例年通り、豊原、吉田南陽軒社中、町内白藤建具展で、22、23、24日奉納花展。 |
| 18 | 1924 | 大正13 | 8.22花 | いけ花展 | 榊太神社奉納生花会 | 今晩より3日間、吉田社中40余名。 |
| 19 | 1924 | 大正13 | 12.28花 | 雑誌広告 | [広告] 『婦女界』新年号 | <実際記事> 松竹梅と投入の活け方 岡田広山 |
| 20 | 1925 | 大正14 | 8.25花 | いけ花展 | [写真のみ、二作品] 吉田魚住社中奉納の活花生花様式 | 榊太神社大祭奉納 |
| 21 | 1926 | 大正15 | 3.26花 | 雑誌広告 | [広告] 『主婦之友』結婚準備号 | <記事・趣味と実用> 春の投入れと盛花のいけ方 (記事の一つ) |
| 22 | 1926 | 大正15 | 7.2茶 | 茶の湯紹介 | [写真のみ] 料理展場内茶の湯の献立 | 過般来、真岡望洋閣で開かれた文化料理展覧会場内茶の湯の献立写真 |
| 23 | 1926 | 大正15 | 7.13花 | 講習会 | 娼妓優遇案協議 更に研究する事となる | 娼妓に「裁縫や生花の類いを習得せしめる様にした。」しかし「彼女等の傾向として余り好む風がないため、更に研究を重ねる」こと。 |
| 24 | 1926 | 大正15 | 7.22花 | 講習会 | 豊廓娼妓優遇案 着々具体化して来たが | 料理、裁縫、生花 (主に主婦としての資格を備えしめる方法) の修業等が実行されることとなった |
| 25 | 1927 | 昭和2 | 7.21花 | いけ花展 | 盛んなりし生花会 会場：大泊幼稚園で | 7月17日、島内花道教授者数10名よりなる全島各流派花道聯合大会は、第1回の聯合会を兼ねて盛大なる生花会を挙行。会員は落合、豊原、大泊。 |
| 26 | 1928 | 昭和3 | 7.3作法 | 講演 | 女礼式に就いて講演す 大家高橋氏が | 東京実科女学校及東京滝ノ川高等女学校家事主任高橋香染氏が、今回来島。榊太氏では同氏を各所に紹介。昨日は通信課、豊原高等女学校、庁病院等で講演会を開いた。 |
| 27 | 1928 | 昭和3 | 8.17花 | いけ花展 | 吉田氏奉納生花会 豊原白藤で | 池坊生花教授吉田南陽軒社中が、榊太神社祭の22日宵祭から25日まで、大通南の白藤建具店で奉納生花会を行う。 |
| 28 | 1928 | 昭和3 | 8.26花 | いけ花展 | 南陽軒社中の生花会盛況裡に終了 | 榊太神社第7回奉納生花会。大泊、豊原、落合、知取に、百数十名の弟子。陳列棚には6、70瓶の生花、盛花、投入れ、とまり船、つり船。 |
| 29 | 1929 | 昭和4 | 1.24花 | 雑誌広告 | [広告] 『主婦之友』2月号 生花大家誌上競技号 | [特集] 生花に上達の秘訣公開 (池坊、古流、投入、盛花)。〔記事〕 お花で成功した婦人立志談 (未亡人、家名再興)。 |
| 30 | 1929 | 昭和4 | 6.5花 | 言説 | 華道に就いて(一) 豊原高女囀託 風早華雲 | 修養第一、遊びや嫁入り道具でない。生花様式、池坊 |
| 31 | 1929 | 昭和4 | 6.6花 | 言説 | 華道に就いて(二) 豊原高女囀託 風早華雲 | 伝花、華道家元への御冥加金について |
| 32 | 1929 | 昭和4 | 6.7花 | 言説 | 華道に就いて(三) 豊原高女囀託 風早華雲 | 今日、華道は修養という点では昔とかわりない。教授指導について |
| 33 | 1929 | 昭和4 | 6.23花 | 雑誌広告 | [広告] 『主婦之友』7月号 夏の子供洋服号 | 〔記事〕 生花の水揚げ新秘訣六十種 |
| 34 | 1929 | 昭和4 | 7.19花 | 言説 | 華道を管見して (上) 豊原 篁孫亭 | 近來は一入盛大、執心者の大部分は御婦人。花姿第一のこと、定められた法則に従い、整った姿に生け表す |

| | | | | | | | |
|----|------|-----|-------|---|-------|--|---|
| 35 | 1929 | 昭和4 | 7.20 | 花 | 言説 | 華道を管見して (中) 豊原 篁孫亭 | 技術第二のこと、節理第三のこと |
| 36 | 1929 | 昭和4 | 7.21 | 花 | 言説 | 華道を管見して (下) 豊原 篁孫亭 | 三大教訓 (花姿、技術、節理) を体得して、新しき歩みを |
| 37 | 1929 | 昭和4 | 9.4 | 茶 | 言説 | 緑茶漫談 連載1 臥牛生 | 茶と日本 (茶にまつわる自分の思い) |
| 38 | 1929 | 昭和4 | 9.5 | 茶 | 言説 | 緑茶漫談 連載2 臥牛生 | 茶の縁起 師匠茶人のこと |
| 39 | 1929 | 昭和4 | 9.6 | 茶 | 言説 | 緑茶漫談 連載3 臥牛生 | 茶を嗜む心 茶人の境地 |
| 40 | 1929 | 昭和4 | 9.7 | 茶 | 言説 | 緑茶漫談 連載4 臥牛生 | 茶器 玉露 |
| 41 | 1930 | 昭和5 | 7.23 | 花 | 雑誌広告 | 〔広告〕『主婦之友』8月号 夏の生花と手芸号 | 〔特集〕夏の生花の生け方写真百種発表、諸流家元十先生の新発表生花上達の秘訣百ヶ条公開。盛花、投入、池坊、その他の流儀花等 |
| 42 | 1931 | 昭和6 | 6.28 | 花 | 言説 | 今流行の抛入や盛花 季節の花について | 現代は抛入、盛花が流行。花材は世界から、床の間と限らない |
| 43 | 1931 | 昭和6 | 8.7 | 花 | 言説 | 切花を少しでも永く生々と保たせるには… | 茎を水平にしてローソクで焼く |
| 44 | 1932 | 昭和7 | 3.25 | 花 | 雑誌広告 | 〔広告〕『婦人倶楽部』4月号の袋入り大付録「生花独習カード」 | 〔付録〕実物そのままの色刷り32枚袋入り、親切な図解と説明つきで、見ればすぐ活けられる。池坊、古流、小原流、安達式、青山御流、遠州流、草月流、清風瓶花、 |
| 45 | 1932 | 昭和7 | 4.23 | 花 | 雑誌広告 | 〔広告〕『主婦之友』5月号 別冊付録無料贈呈 (洗濯と染色) | 〔特集〕家元大家総出 盛花と投入の写真画報と生方、実物通りの彩色で発表した誌上展覧会 |
| 46 | 1932 | 昭和7 | 7.6 | 花 | 生花店広告 | 〔広告〕渡辺生花店 | 生花盆栽類豊富 豊原大通南三丁目、配達迅速。電話2403番 |
| 47 | 1932 | 昭和7 | 11.10 | 花 | 言説 | 真岡に於ける華道大会批評 相阿弥正流塩浦晴峰庵 | 本島最初の催しとして、真岡北進新聞社主催各流華道大会非常に盛会。細川流盆石、池坊、専慶流、相阿弥正流、松月堂古流 |
| 48 | 1932 | 昭和7 | 12.7 | 花 | 師匠紹介 | 奈良春月 女史の華道研究と教授 豊原青年会館で | 今回10月下旬より、二ヶ月京都池坊で研究、教授職を得る。会館で教授を始める。安価な島製品で習い得ることをモットーとする。家元で研究は稀。 |
| 49 | 1933 | 昭和8 | 1.22 | 花 | 雑誌広告 | 〔広告〕『主婦之友』2月号 二大付録。第一付録：写真で説明した新案の独習法、生花一切の生け方 (日本で初めて出来た生花大全集)。第二付録：お灸で治る病氣 | 〔第一付録〕家元大家32名の先生方が、一切の秘法を公開した24流儀の生花の生け方を集めた大付録。お花を稽古なさる方には誰にでも必要な生花全集。二度と得られぬ大付録。盛花、投入、池坊、古流、未生流の独習法 |
| 50 | 1933 | 昭和8 | 3.29 | 花 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(一) 小野雨声氏談 | 生花：花器、水揚げ |
| 51 | 1933 | 昭和8 | 3.30 | 花 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(二) 小野雨声氏談 | 生花：生け方 |
| 52 | 1933 | 昭和8 | 3.31 | 茶 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(三) 小野雨声氏談 | 茶の湯：歴史、道具 |
| 53 | 1933 | 昭和8 | 3.31 | 花 | 生花店広告 | 〔広告〕花重 渡辺生花店 | めずらしい乙女椿、桜其他沢山着荷 豊原大通南三丁目、配達迅速 どうぞ御用命を願います。電話2403番 |
| 54 | 1933 | 昭和8 | 4.1 | 茶 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(四) 小野雨声氏談 | 茶の湯：道具 |
| 55 | 1933 | 昭和8 | 4.2 | 茶 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(五) 小野雨声氏談 | 茶の湯：道具 |

| | | | | | | | |
|----|------|------|---------|-------|---|---|--|
| 56 | 1933 | 昭和8 | 4.5茶 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(六) 小野雨声氏談 | 茶の湯：用語、薄茶 | |
| 57 | 1933 | 昭和8 | 4.5花 | 生花店広告 | [広告] 花重 渡辺生花店 | めずらしい乙女椿、桜其他沢山着荷 豊原大通南三丁目、配達迅速 どうぞ御用命を願います。電話2403番 | |
| 58 | 1933 | 昭和8 | 4.6茶 | 言説 | 趣味講座 生花と茶道(七) 小野雨声氏談 | 茶の湯：濃茶 | |
| 59 | 1933 | 昭和8 | 4.7花 | 生花店広告 | [広告] 花吉 酒井生花店 豊原町神社通 電話三〇七〇番。 | 諸流生花・盛花投入材料。御床に卓上に期節の活花材料なら何でも豊富に何時でも揃う酒井へ多少に拘わらず御用命を 豊原各女学校・豊原華道公正会御用達。配達迅速。 | |
| 60 | 1933 | 昭和8 | 4.19花 | 言説 | 自然から見た盛花。池坊生花・小原流盛花教授 後藤歩月氏談、作品・顔写真(男性) | 美よりも野趣を導ぶ 色彩＝調和美に重きを置く | |
| 61 | 1933 | 昭和8 | 4.23花・茶 | いけ花展 | 【東京】万国婦人子供博覧会、華道館見学 茶室 | 豊原高等女学校の修学旅行記第十一信、4月3日分。生花は勿論の事、用具等の陳列、見たことのない立派な花器など。 | |
| 62 | 1933 | 昭和8 | 6.20茶 | 言説 | 茶道閑話 奥深い日本趣味 真岡、狐狗狸庵 生 | 精神修養上得る所は少なくない。今夏、裏千家宗家来島か、真岡の裏千家茶道教授、御牧安子氏の託に宗家執事から内報、今夏、札幌市に於いての茶の湯大会の機会に足を延ばしてみたい。 | |
| 63 | 1933 | 昭和8 | 8.5花 | 言説 | 夏の生花 専慶流花道師範代御牧安子 | 成る可く自分で採取した材料で | |
| 64 | 1933 | 昭和8 | 8.5花 | 生花店広告 | [広告] 花重 渡辺生花店 豊原大通三丁目。電話二四〇三番。 | 今日のニュース カキツ、芍薬、菖蒲、小菊、中輪菊ほか盛花、投入材豊富に取揃えてあります。配達迅速 どうぞご来店を | |
| 65 | 1933 | 昭和8 | 11.5花 | 生花店広告 | [広告] 渡辺生花店 豊原大通三丁目。 | 各種生花材販売 配達迅速 どうぞご来店を。電話二四〇三番。 | |
| 66 | 1934 | 昭和9 | 2.21花 | 生花店広告 | [広告] 渡辺生花店 豊原大通三丁目。 | 各種生花材販売 配達迅速 どうぞご来店を。電話二四〇三番。 | |
| 67 | 1934 | 昭和9 | 3.1花 | 言説 | 生花と解悟 家元池坊生花・小原流盛花教授後藤歩月 | 華道は娯楽の具ではありません。つまり生花に依って悔悟することにある。精神の統一、茶道もまた同じ。 | |
| 68 | 1934 | 昭和9 | 8.18作法 | 言説 | 家庭欄 礼儀作法に就いて | 礼儀作法 | |
| 69 | 1934 | 昭和9 | 11.22花 | 言説 | 家庭欄 生け花の知識 切花の長持ち法 | 切り花の長持ちする方法を伝授。一般的な方法から菊、カーネーション、バラダリヤの方法。 | |
| 70 | 1935 | 昭和10 | 1.16花 | 生花店広告 | [広告] 生花材販売 渡辺生花店 | 新花材豊富入荷 水揚葉もあります。配達迅速 どうぞご用命を | |
| 71 | 1935 | 昭和10 | 1.19茶 | 茶会 | 「婦人だより」裏千家茶道会 | 於王子知取俱樂部。時局下に相応しい奥床しき催しであった。 | |
| 72 | 1935 | 昭和10 | 3.21花 | 生花店広告 | [広告] 生花材は渡辺に限る | 電話二六四九番 | |
| 73 | 1935 | 昭和10 | 6.22茶 | 言説 | 禅と茶道 奥野院頼山 | 茶は精神修養の手段 | |
| 74 | 1935 | 昭和10 | 6.29花 | 言説 | 生花の秘訣(上) 池坊生花・小原流盛花教授後藤歩月 | 自分のいけた花はどこまでも自分の流儀だと考えたい。最近は七宝の中に針の出たものも用いられるようになってきた。 | |

| | | | | | | | |
|----|------|------|-------|-----|-------|---|---|
| 75 | 1935 | 昭和10 | 7.27 | 花 | 生花店広告 | 〔広告〕新花材販売 渡辺生花店 豊原町大通南3丁目 電話二六四九番 | 花材豊富 水揚げ葉あり 配達迅速 何うぞ御用命を |
| 76 | 1936 | 昭和11 | 3.23 | 花・茶 | 雑誌広告 | 〔広告〕『婦人倶楽部』4月号 別冊付録 諸流活け花と茶の湯 | 〔別冊付録〕誰方にも易々と独習出来る初めて出来た独習書 活け花：生花、盛花、投入の活け方三十流派の大家指導。茶の湯：正式平手前指導表千家井野竹代先生。略式お盆点指導裏千家戸宗寛先生。表千家の雑誌発表はこれが初めてです。 |
| 77 | 1936 | 昭和11 | 3.23 | 花 | 雑誌広告 | 〔広告〕『婦人倶楽部』4月号 | 〔記事〕女芸で身を立てた末亡人の苦闘物語。一流の活花師匠の二女性 |
| 78 | 1936 | 昭和11 | 5.16 | 花・茶 | 講習会 | 新日本の婦道を修む 花嫁学校あす開校 | 豊原高女内に設けられた家政専攻部(花嫁学校)入学式挙行。華道・茶道あり。 |
| 79 | 1936 | 昭和11 | 7.9 | 花 | 講習会 | 【東京】生花供養 東京芝公園増上寺 | 日本華道普及主催、東京都下の女学生、生花商、花道関係者、一万余名が参集 |
| 80 | 1936 | 昭和11 | 7.18 | 花 | 講習会 | 【東京】日本文化の神髄 熱心なアチラの研究家 | 東洋美術研究に來朝の米國研究団一行14名。於、國際文化振興會。生花・日本画・木版・型染め |
| 81 | 1937 | 昭和12 | 9.26 | 花 | 言説 | 作品写真(盛花)の掲載 | 題「風趣の秋」 豊原、小原流、林陽月の作品 |
| 82 | 1937 | 昭和12 | 9.29 | 花 | 言説 | 家庭欄 作品写真(生花様式)の掲載 | 題「風趣の秋」 豊原、松月堂古流、土屋千瓢の作品 |
| 83 | 1937 | 昭和12 | 10.2 | 花 | 言説 | 家庭欄 作品写真(投入)と随想と作品解説 | 秋の花と其の幽趣 池坊生花・小原流盛花投入教授 後藤歩月 |
| 84 | 1937 | 昭和12 | 10.16 | 花・茶 | 言説 | 家庭欄 花と茶之湯 (一) 大日本祇園流家元 吉村基水 | 家庭修養の座右として。華道について。葉蘭について。 |
| 85 | 1937 | 昭和12 | 10.21 | 花・茶 | 言説 | 家庭欄 花と茶之湯 (二) 大日本祇園流家元 吉村基水 | 華道(葉蘭)：生け方、花器、花台、水揚法、用席などについて |
| 86 | 1937 | 昭和12 | 10.22 | 花・茶 | 言説 | 家庭欄 花と茶之湯 (三) 大日本祇園流家元 吉村基水 | お作法の必要。全国民が常に修養しておきたい茶の湯。 |
| 87 | 1939 | 昭和14 | 7.4 | 花 | 言説 | 家庭欄 樺太にふさはしい投入と盛花 花道の郷土化、實際化をはかりましょう(上) 池坊盛花 中川鶴月 | 花道は事変の影響でやや衰えた。樺太の建築物の床の間が取り入れられていないご家庭では、生花よりも盛花、投入などの方が適當。 |
| 88 | 1939 | 昭和14 | 7.7 | 花 | 言説 | 家庭欄 樺太にふさはしい投入と盛花 花道の郷土化、實際化をはかりましょう(下) 池坊盛花 中川鶴月 | 活け方解説：盛花の作品写真3点。 |
| 89 | 1939 | 昭和14 | 8.12 | 花 | 師匠紹介 | 趣味と教養を 夏の婦人講習二題：生花と書道 | 8月6、7日の2日間、商工会議所において、池坊龍生派の家元から巡回教授の御出張(来島)。生花の講習会 |
| 90 | 1939 | 昭和14 | 8.12 | 花 | 言説 | 紙上活花講座 池坊龍生派巡回教授 | 巡回教授の名和・石倉先生が来島されたのを機会に、お花の取り扱い、活ける際の心構えなどをお聴きました。 |
| 91 | 1939 | 昭和14 | 8.15 | 花 | 言説 | 活花 盛ばな | 菅蒲と水蓮の盛花の写真と解説。 |
| 92 | 1939 | 昭和14 | 8.16 | 花 | 言説 | 活花 生花 | 菅蒲の生花の写真と解説 |

| | | | | | | | |
|-----|------|------|------|----|----|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 93 | 1939 | 昭和14 | 8.26 | 花 | 言説 | 活花 水揚げ | 安達流家元・安達潮花による水揚げ方法の記事 |
| 94 | 1940 | 昭和15 | 1.19 | 茶 | 茶会 | 婦人だより 知取真千家茶道会 | 年始めのお茶会、王子知取俱樂部にて。時局にふさわしい奥床しい催し。 |
| 95 | 1940 | 昭和15 | 1.31 | 作法 | 言説 | 家庭欄 婦人の御作法 (一) | 椅子にかけるときには左側からが礼儀です |
| 96 | 1940 | 昭和15 | 2.4 | 作法 | 言説 | 家庭欄 婦人の御作法 (二) | 手袋の取扱いに注意 |
| 97 | 1940 | 昭和15 | 2.23 | 作法 | 言説 | 家庭欄 婦人の御作法 (三) | 自動車に乗る位置と往来で挨拶する時の心得 |
| 98 | 1940 | 昭和15 | 2.25 | 作法 | 言説 | 家庭欄 婦人の御作法 (四) | お茶の頂き方 |
| 99 | 1940 | 昭和15 | 2.26 | 作法 | 言説 | 家庭欄 婦人の御作法 (五) | 言葉づかいと映画館の脱帽 |
| 100 | 1940 | 昭和15 | 3.20 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (一) | 昨年(1939年)4月文部省制定の国民新儀礼をうけて。長上との同行 |
| 101 | 1940 | 昭和15 | 3.23 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (二) | 近隣の交際、公衆の席 |
| 102 | 1940 | 昭和15 | 3.24 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (三) | 他家へ訪問、接待の心得 |
| 103 | 1940 | 昭和15 | 3.28 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (四) | 和食の席 |
| 104 | 1940 | 昭和15 | 3.29 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (五) | 洋食の席 |
| 105 | 1940 | 昭和15 | 3.30 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (六) | 菓子、コーヒー、他人を紹介 |
| 106 | 1940 | 昭和15 | 4.3 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (七) | 慶凶の贈答、和室の席次 |
| 107 | 1940 | 昭和15 | 4.5 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (八) | 日本間の儀礼、洋間の椅子 |
| 108 | 1940 | 昭和15 | 4.6 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (九) | 女子の洋装、男子の和服 |
| 109 | 1940 | 昭和15 | 4.7 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (十) | 婦人の正装に |
| 110 | 1940 | 昭和15 | 4.10 | 花 | 言説 | 家庭欄 椿の盛花 雪洲流家元 中村如遊氏談 | 自作の椿の盛花の写真、古歌にも歌われた椿について。 |
| 111 | 1940 | 昭和15 | 4.11 | 作法 | 言説 | 家庭欄 続・婦人のお作法 (十一) | お慶びの手紙 |
| 112 | 1940 | 昭和15 | 5.31 | 作法 | 言説 | 家庭欄 [女性の礼法・お作法] 小笠原 流宗家作法師範 遠藤宗伯氏談 | 女性の作法には優しい心遣いが必要 窮屈な型に当て嵌めるは無理 |
| 113 | 1940 | 昭和15 | 6.1 | 作法 | 言説 | 家庭欄 [女性の礼法・お作法] 小笠原 流宗家作法師範 遠藤宗伯氏談 | 天目は眼八分に捧げること |
| 114 | 1940 | 昭和15 | 6.2 | 作法 | 言説 | 家庭欄 [女性の礼法・お作法] 小笠原 流宗家作法師範 遠藤宗伯氏談 | 杓元迄見えるやうに頭を下げるのは失礼 |
| 115 | 1940 | 昭和15 | 6.15 | 茶 | 言説 | 家庭欄 [修養講座] 茶の湯 (上) 表千家流 栗山さく | 和敬清寂を尊ぶ茶の湯の心 |
| 116 | 1940 | 昭和15 | 6.16 | 茶 | 言説 | 家庭欄 [修養講座] 茶の湯 (下) 表千家流 栗山さく | 茶道の秘事は真心籠めてのお点前 |

| | | | | | | | | | |
|-----|------|------|-------|---|----|----------------|--------------------------------|--|---------------------------------|
| 117 | 1940 | 昭和15 | 9.11 | 花 | 言説 | 家庭欄 洲流家元 | 質実な戦時生活を 中村如遊 | 彩る花の美 雪 | 自作投入の写真、解説。花材：竹島百合（解説内容に戦時色はなし） |
| 118 | 1940 | 昭和15 | 9.26 | 花 | 言説 | 家庭欄 と小菊の盛花。 | 秋色ゆたかな雁来紅（はげいとう） 松風流家元 押川如水 | 自作盛花の写真、解説。（解説内容に戦時色はなし） | |
| 119 | 1940 | 昭和15 | 11.9 | 花 | 言説 | 趣味娯楽 | 奉祝の活花 花材は松と菊 | 雪洲流家元中村如遊作、投入の写真。紀元二千六百年の祝典を迎え、家の床の間に も、この日を寿ぐ生花を飾り、お祝いをいたしましたしょう。 | |
| 120 | 1940 | 昭和15 | 11.12 | 花 | 言説 | 趣味 方 | 誰でも知っておきたい 仏前の花の挿し | 仏前の花の作品写真、安達潮花氏作。解説。 | |
| 121 | 1940 | 昭和15 | 12.28 | 花 | 言説 | 趣味娯楽 | 新春の活花 | 安達潮花作、勅題「漁村の曙」の写真。作品解説。 | |
| 122 | 1941 | 昭和16 | 1.11 | 花 | 言説 | 家庭欄 | 床の間の生花 正しい挿しの仕方 | 勅題「漁村の曙」の盛花の写真（12月28日掲載の安達潮花の作品）、記事内容は生花 の正しい挿しの仕方 | |
| 123 | 1941 | 昭和16 | 11.20 | 花 | 言説 | 家庭欄 | 垂れるものの挿し方 | 投入の作品写真と花の入れ方 作品作者名・筆者名なし | |
| 124 | 1941 | 昭和16 | 11.27 | 花 | 言説 | 家庭欄 | なんてんと小菊 初冬の床の間を飾る | 盛花の作品写真と花の入れ方 作品作者名。筆者名なし | |
| 125 | 1942 | 昭和17 | 1.8 | 花 | 言説 | 文化家庭 雪洲流家元 | 戦勝祈願の花 （一）八千代変らぬ椿 中村如遊 | 投入の作品写真。うすべにの椿と純白の水仙、清らかに愛らしい姿に、皇軍勇士の活 躍をいのる心をいっばいにこめて | |
| 126 | 1942 | 昭和17 | 1.8 | 茶 | 言説 | 茶道と悟道 | | 今日、一碗の茶に軍人の心をひきしめ、生死の境を越えた悟道への門として茶道が選 ばれた | |
| 127 | 1942 | 昭和17 | 1.9 | 花 | 言説 | 文化家庭 一梅と椿— | 戦勝祈願の花 （二）日本精神の象徴 中村如遊 | 投入の作品写真。戦時下の新年を迎えて、前線も銃後も心一つに聖戦の目的を遂に向 かうとき、大和島根に生ける草木の一枝までも、おとらじと、戦勝祈願の姿もいと くみられます。 | |
| 128 | 1942 | 昭和17 | 1.10 | 花 | 言説 | 文化家庭 一梅と椿— | 戦勝祈願の花 （三）日本精神の象徴 安達潮花 | 盛花作品写真。「戦勝祈願の心をこめて挿しましょう。」自作コンポートは、「国民 の一人々々々が人柱となって、この国土を守りつづける」という意味です。」 | |

* 「種類」欄において、いけ花を花、茶の湯を茶、茶の湯を花、茶の湯を作法と記した。

信内容ひいては有り様を見ていく。以下、【表1】を参照されたい。

①いけ花

【表1】から、一見していけ花に関する記事が圧倒的に多いことがわかる。またその内容は(1)師匠と流派、いけ花展・講習会 (2)言説 (3)婦人雑誌・生花店の広告、に分けられる。

(1)師匠と流派、いけ花展・講習会

いけ花の師匠として新聞に最初に名前が見いだされるのは、吉田南陽軒である。吉田氏は池坊生花教授として1920年5月、福島県華道会から樺太へ転任を命ぜられ来島した。当時53歳、男性、福島市生まれ、裏千家の茶の湯も嗜んでいた。当初は同地でいけ花を習う人も少なかったが、1922年から毎年、樺太神社大祭奉納いけ花会として社中展を豊原大通南の白藤建具店で開いた。1923年には弟子40余名のなかにロシア人も1名いた。1924年には豊原国華会支部長であるとともに大泊、豊原、落合に弟子を持ち、1928年にはそれに加え知取に、合わせて百数十名の弟子を持つようになった。しかし同氏に関する新聞記事は、1928年で見いだせなくなる。いっぽう1924年の師匠紹介記事で太田春水について、池坊生花教授で弟子は30名ほど、茶の湯は表千家で弟子は相当にあったとある。

その後、池坊の師匠に関しては1932年、奈良春月（女性）が京都池坊家元で2ヶ月研究、教授職を得て帰島、豊原の青年会館で教え始めたことや、1933年以降、池坊生花・小原流盛花教授の後藤歩月（男性）の作品解説や随想の掲載、1939年池坊盛花として中川^{けん}鶴月の盛花についての記事が見いだせる。

樺太に於けるいけ花師匠の組織化については、1927年に大泊の大泊幼稚園で、第1回の全島各流花道聯合大会が開催され豊原、大泊、落合の花道教授者数十名が参加した。1932年には真岡で本島最初の催しとして各流華道大会が開かれた。また北海道から来島しての教授も行われ、1923年大泊で、札幌市から来島しての小原流盛花投入の講習会が行われ、1939年豊原で、池坊龍生流派家元巡回教授・生花（せいか）の講習会の記事が見いだせる。いっぽう1926年7月13、14日の記事から、豊原遊郭の娼妓に、「主に主婦としての資格を備えしめる方法」として料理、裁縫とともにいけ花を教えることが決められた。

樺太において活動、ないしは新聞に作品等が掲載されたいけ花の流派は池坊、小原流、風早流、相阿弥正流、専慶流、細川流盆石、松月堂古流、大日本祇園流、池坊龍生派、安達流、松風流、雪洲流が見いだせる。また記事内容から1920年以降、樺太の豊原、大泊、落合（東海岸、豊原から北へガソリンカーで1時間）をはじめとして知取（東海岸北部）、真岡（西海岸）というように、都市部を中心に師匠ならびに習得する者が増えていったことがわかる。

豊原高女卒業生からの聞き取りにもあったように、北海道から師匠が来島することもあったが、樺太に定住して教える者も多く、流派も多様であった。樺太神社大祭に合わせていけ花展が催されるなど、多くの人目に止まるものであり、1926年7月、豊原遊郭娼妓にも「主婦としての資格を備えしめる方法」の一つとして教えるものとされた。

(2)言説

同紙には、いけ花の歴史や理念に関することや、いけ花作品と解説等が掲載された。そこではいけ花が修養であり、精神性を重んずるものであり、花型があり、技術が必要であることが説かれている。いっぽう趣味講座としても扱われている。

留意したいのはそれに加えて1940年9月11日、「質実な戦時生活を」と題しいけ花作品が掲載され、同年11月9日には紀元二千六百年の祝典の花・いけ花作品が掲載され、1942年1月8、9、10日には「戦勝祈願の花 一日本精神の象徴」（作品と解説）全3回が連載されたことである。

たとえば第2回を担当した雪洲流家元中村如遊は1月9日、「戦勝祈願の花 一日本精神の象徴 (二) 一梅と椿一」において、いけ花作品を掲載するとともに、

いかなる寒気にもめげず、春にさきがけてふくいくと香り出す梅花は、隠忍自重、あらゆる困難に堪えながら一度正義の剣を取って立てば、戦勝また戦勝大東亜の盟主たる実力をほしいまゝに、世界をあっと驚かせる日本精神を、さながらに象徴するものでありましよう。

と述べている。太平洋戦争の開戦により、いけ花も戦争とは無縁でなくなったことが見て取れる。

(3)「婦人雑誌」・生花店の広告

1.「婦人雑誌」広告のなかのいけ花

同紙には「婦人雑誌」¹²⁰の主に『婦人倶楽部』¹²¹と『主婦之友』¹²²の広告が毎月掲載され、特集記事や付録の見出し、内容の概略が載せられた¹²³。広告とは概して記事のあらましをつかんだものであることが多く、その内容を窺い知ることができる。

両誌の広告において、雑誌のなかの一記事としていけ花や茶の湯、礼儀作法を扱ったのは『婦人倶楽部』のほうが先であったが、特集記事として、いけ花について大々的な掲載をしたのは1929年『主婦之友』2月号が最初であり、「上達の秘訣公開」とあった。1年半後の1930年『主婦之友』8月号で再度、いけ花の特集が組まれた。やはり「上達の秘訣公開」とある。いっぽう『婦人倶楽部』は1932年4月号で、袋入り大付録として「生花独習カード」を付けた。それに対し、同年『主婦之友』5月号は特集として、いけ花の誌上展覧会を企画した。さらに『主婦之友』は翌1933年2月号で、第1付録に「独習のための生花全集」を企画した。しかしその後3年間は大きな動きは見られず、1936年『婦人倶楽部』が4月号別冊付録「どなたにも易々と独習できる初めてできた独習書」としていけ花、茶の湯を扱ったことを最後に見いだせなくなる。

ここからは、いけ花（茶の湯）が、毎号の記事として扱われることは少なく、特集記事としてや、別冊付録として独習教材として扱われたことがわかる。またお茶・お花としてでなく、いけ花が単独で取り上げられている。それは1929年2月から1933年2月までの4年間に集中している。その後3年の時を経て、いけ花と茶の湯の独習書が企画されたが、以後、いけ花（と茶の湯）に関する広告内容は見いだせない。理由として1937年7月の日中戦争勃発との関係が考えられる。特にいけ花、茶の湯は修養であるとともに遊芸として存在、認知されており、戦時下に相応しくないとする考えもあったためと思われる。雑誌詳細に関しては別稿に譲りたい。

2. 生花店の広告

生花店の広告は1932年から1935年の間に見られる。豊原には少なくとも酒井生花店と渡辺生花店があった。酒井生花店の広告は一度のみである。同店は豊原高等女学校や豊原市華道聯合会、専正池坊表現派みどり会の御用達で、北海道札幌市に本店があり¹²⁴、広告を出す必要

¹²⁰ 木村涼子は婦人雑誌における「賞賛される女性」の物語として、いけ花など芸事分野での成功があったことを指摘している（『〈主婦〉の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館 2010年、132～148頁）。

¹²¹ 刊行期間：1920～1988年、創刊時は『婦人くらぶ』であったが、1921年1月号から『婦人倶楽部』に変更した。同誌は『主婦之友』『婦人公論』『婦人画報』とともに戦前の四大婦人雑誌として数えられた。

¹²² 刊行期間：1917～2008年、1954年1月号から『主婦の友』に変更した。昭和初期には発行部数は百数十万部であった（鈴木省三『日本の出版界を築いた人々』柏書房 1985年、310頁）。また1917年、創刊の三年後には、雑誌発行部数第一位を記録した（石川武美『わが愛する生活』主婦之友社 1940年、99頁）。

¹²³ 雑誌広告は両誌のほか『キング』『日の出』が多く、ほかに『婦人公論』『婦女界』など

¹²⁴ [花店広告]『北海道樺太 茶華道教授銘鑑』華道新聞社 1937年

がそれほどなかったのであろう。それに比べ渡辺生花店の広告が多い。両者はいずれもいけ花の花材を扱っていた。ここから豊原には一定数のいけ花の師匠、習（修）得者、愛好者があったことがわかる。

以上のように「婦人雑誌」の広告、生花店の広告に着目すると、1930年代前半が最もいけ花に注目が集まった時期といえ、樺太もその流れの中にあったといえる。

②茶の湯の記事

【表1】から明らかなように茶の湯の記事は、いけ花の記事にくらべて圧倒的に少なく、作法の記事よりも少ない。いけ花は、一人で作品を作り完結することもできるが、茶の湯は座敷空間・茶道具等の必要、また稽古には主客複数的人数が必要となることが理由として考えられる。

1924年5月婦人修養会の講習、1940年6月「修養講座」ではいけ花とともに掲載され、茶の湯も修養と捉えられたが、1933年にはいけ花とともに「趣味講座」としても連載があり、趣味としてもあったことがわかる。広告からいえるように1930年代前半は、いけ花や茶の湯が盛んになった時期で、修養としてあるだけでなく趣味としてあることにより、より広い裾野を得たといえる。一人の人物（師匠）がいけ花と茶の湯の両方を修得して教えていることもあった。

記事は歴史、道具、用語、茶葉、茶の湯の精神について述べられている。「婦人雑誌」広告にもいけ花とともにある。流派は表千家、裏千家と大日本茶道学会が見いだされる。

留意したいのは、すでに1935年1月19日、「時局下にふさわしい奥床しい」催しとの位置付けをして茶の湯の会が行われていることであり、1942年1月9日の記事「茶道と悟道」（執筆者名は「天地人」とあり、本名は不明）には、

この頃海軍の間に茶の湯が流行しているといふ噂を耳にした。時局と茶道との結びつきは敢えて驚くに足らない。茶道は元来一つの悟道であるとは、昔から諸流派の開祖によって説かれたところである。（中略）茶道は長いこと婦女子の嗜みか然らば資産家の趣味として眺められる傾向があったが、今日、一碗の茶に軍人の心をひきしめ、生死の境を越えた悟道への門として茶道が撰ばれたのは、その本来の意義に立ちかえたものというべきであろう。

とある。茶の湯もまた戦時体制に組み込まれていったことがわかる。

いっぽういけ花・茶の湯に関し、同紙に頻繁に掲載された能楽に関する記事とは異なる面が見いだされる。いけ花・茶の湯はその歴史や精神性が説かれ、また道具の紹介やいけ花の作品・解説が掲載されている。しかし同じく日本の伝統的な文化である能楽（謡曲）であったが、同紙にその歴史や精神性についての言及はみられない。ただ同地各地域に組織（観世会や宝生会の支部）が結成されたことや、その集まりの通知、演目が載せられている。いけ花・茶の湯の場合、その歴史・精神性のアピールをすることで遊芸というイメージを払拭し、日本の伝統的文化としての体面を保とうと努めていたといえる。それは戦時下、なおさらのことであった。

③礼儀作法の記事

【表1】から、拾い上げた記事の大部分が、1939年4月に発表された文部省制定「国民新儀礼」¹²⁵を受けての連載であることがわかる。同儀礼は、「徳川義親侯を委員長とする三十余名の礼法制定委員会で一ヶ年にわたり各方面の礼法を研究の結果、昭和時代の大国民にふさわしい威容と儀礼を正す礼法」として制定された¹²⁶。

記事は、翌1940年1月末からおよそ半年をかけて「婦人の御作法」連載全5回、「続・婦人

¹²⁵ 土屋喜多尾『現代図解礼儀作法：国民昭和儀礼』日本図書出版社 1939年、はしがき3、4頁

¹²⁶ 『樺太日日新聞』1940年3月20日

のお作法」連載全11回、続いて小笠原流宗家作法師範による「女性の礼法・お作法」連載全3回である。連載内容は国民新儀礼の各内容について、女性に向けて毎回、実際にどのようにすべきかがわかりやすく解説されている。礼儀作法もまた時局に組み込まれていた。

おわりに

本稿は、樺太におけるいけ花・茶の湯・礼儀作法について、内地との関係性を念頭に置き高等女学校、樺太拓殖共進会、万国婦人子供博覧会、『樺太日日新聞』から、その受容について考察した。対象は衣食住が足りた生活を送った人々である。

まず高等女学校での受容について、樺太の女子中等教育を代表する存在であった豊原高女では学力・進学に力を入れるとともに、作法は言うまでもなく、いけ花・茶の湯も通り一遍の実技ではなく、女子の修養として課外に教えられた。いっぽう豊原高女卒業生への聞き取りと大泊高女の短歌の作例から、いけ花が家庭で母親や姉によって嗜まれていたことがわかる。留意したいのは、短歌の題材としてのいけ花は、内地の高等女学校・女学校では見いだせないが、外地の青島日本高等女学校には見いだせる。また通常、内地の高等女学校では、卒業写真帖(アルバム)にはいけ花・茶の湯・礼儀作法の写真を掲載することはない¹²⁷。それは家庭において習得できるものであり、特筆すべきことではないからである。もとより学校ではほんの一通りの習得であった。しかし外地の女学校・高等女学校では、日本人女性としての嗜みを習得したことを主張するため掲載している。これに対し樺太は1918年以降、内地に含まれることが規定され、それ以前から旧制中学校が高等女学校よりも先に設立されるなど、内地と同様の暮らしが見られる。このことから内地として暮らしながらも、外地であるという意識が同地において持たれていたといえる。

次に樺太拓殖共進会や東京で開催された万国婦人子供博覧会の華道館・茶室の見学から、女生徒は、世界に誇るべき日本の女性文化、伝統的文化としていけ花・茶の湯があることを認識したと考える。

『樺太日日新聞』からは、樺太では特に茶の湯よりもいけ花界からのアプローチがあった。またいけ花・茶の湯の師匠は同地に移り住み教えた。いけ花・茶の湯の歴史や精神性が語られ、同地における主婦に必要なものと位置付けられた。いけ花・茶の湯に最も注目が集まったのは1930年代前半で、1935年以降、さらに太平洋戦争開戦により、戦争とは無縁でなくなった。1939年4月文部省制定「国民新儀礼」が発表され、戦時下、満洲の事例¹²⁸にみられるように、日本人女性の精神的統率の要として、いけ花・茶の湯・礼儀作法はあった。

*立命館大学 衣笠総合研究機構客員研究員 博士(学術)、博士(文学)

【謝辞】史資料調査に関し一般社団法人全国樺太連盟、稚内市樺太記念館、北海道大学附属図書館、北海道立図書館をはじめ関係諸機関関係各位、また樺太の高等女学校ご出身の方々に、貴重なるお話をお聞かせいただきましたこと、記して深謝いたします。

¹²⁷ しかし内地でも、都市部とは異なり習得の機会が限られる地方の女学校や、都市部地方に限らず作法室新築披露などのため、掲載されることもあった。

¹²⁸ 小林善帆「『女性満洲』と戦時下のいけ花」『立命館言語文化研究』第26巻4号 立命館大学国際言語文化研究所 2015年、108～114頁(河原典史・日比嘉高編『メディア 一移民をつなぐ、移民がつなぐ』クロスカルチャー出版 2016年所収、前掲注(3)「帝国支配といけ花」第6章、所収。)